昭和三十七年度

財団法人

東洋文庫年報

東洋文庫

昭和三十七年度東洋文庫年報

目　次

一　東洋学センターとしての東洋文庫……一
二　昭和三十七年度に於ける東洋文庫……三
三　チベット学の現状について（講演要旨）……北村　甫……五
四　職　員……一五
五　事　業……二三
1　刊行図書……二三
2　講演会（東洋学講座）……二三
3　研究会（東洋文庫談話会）……五九
4　展示会……六〇
5　図書の収蔵及び閲覧……六一
（A）資料室　（B）国立国会図書館支部
6　資料複写……六九
7　情報連絡……七〇

六　研究調査活動……七三
1　東洋学連絡委員会……七三
2　機　関　研　究……七四
3　各種研究委員会……七六
第一部　近代現代アジア研究……七六
近代日本研究委員会……七六
近代中国研究委員会……七六
第二部　東アジア研究……七八
敦煌文献研究委員会……七八
宋代史研究委員会……八〇
明代史研究委員会……八一
清代史研究委員会……八二
古代史、朝鮮研究会……八三
第三部　中央アジア・イスラム・チベット研究……八三
中央アジア・イスラム研究委員会……八三
チベット研究委員会……八四

第四部　南アジア・インド研究……八五
南アジア研究委員会……八五
4　研究者養成……八六
5　職員の研究業績……八八
附(一)　ユネスコ東アジア文化研究センター……九九
(二)　東洋学術協会……一〇八

一　東洋学センターとしての東洋文庫

東洋文庫は、大正六年（一九一七）、故岩崎久弥氏が中華民国総統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソン氏の蔵書を購入して設けられた東洋学関係の専門研究図書館である。大正十三年（一九二四）に現在地に財団法人として設立せられてより今日まで、研究部・図書部・総務部を設け、(イ)アジア各地域の研究資料を網羅的に収集し、(ロ)東洋学の研究を推進すると共に全国の専門研究者に便宜を供与し、(ハ)各種の貴重な資料の複製を行い、重要な研究業績を出版し、(ニ)あわせて東洋学の普及事業と研究者の養成とに専念してきた。第二次大戦後の経済事情変動のため打撃をうけた東洋文庫は、昭和二十三年（一九四八）図書部が国立国会図書館支部となつて、その維持管理を受けることとなつたほか、更に民間学術研究機関補助金、外国よりの援助金が寄せられて、研究部の事業と組織体制とを整えてきた。

東洋文庫の特色は、専門図書館としての文献資料センターの機能と、総合的研究機関としての研究センターの機能及び国内的国際的研究情報センターとしての機能を兼ね具えている点にある。東洋文庫は、(イ)一般研究者に対し収集資料を公開し、民間機関としての自由な立場で運営されている。(ロ)一大学、研究機関個々では系統的収集の困難な資料に重点を置いて収集している。(ハ)海外及び地方在住研究者に対しても、マイクロフイルムによる資料複写サービスを行い、収蔵せる貴重資料を覆刻して逐次刊行し学界に提供している。(ニ)一大学、一研究所の枠を越えた総合的研究体制を取つて、各大学、研究機関に跨る流動的共同研究、国際的協力研究を行つている。(ホ)国内的及び国際的研究情

報の交換、通信連絡の衝に当り、我が国の研究成果を広く海外に紹介している。(ハ)我が国東洋学の成果を広く一般に普及し、来日せる海外のすぐれた東洋学者の講演を公開する場を提供し、また貴重な資料を展示する活動を行つている。(ト)東洋学の特殊な専門研究者を養成し、各大学の大学院博士過程修了程度の人材に引続き数年間の研究の機会を与え、特に比較的未開拓な分野の研究を促進せしめている。人文社会科学の振興が叫ばれ、その方策として総合的研究センター乃至専門文献センターの設置、整備が唱えられつつあるとき、従来よりその方向を目指して活動してきた東洋文庫には、一層内外の期待がかけられている。

二　昭和三十七年度に於ける東洋文庫

昭和三十七年度における東洋文庫の一般事業は、前年に引続き文部省大学学術局を通じて日本政府から、またハーヴァード・エンチン研究所、東洋文庫維持会から、補助金並びに援助金を受けて行われた。

文部省補助金による出版物としては、「東洋文庫欧文紀要・第二十二」「東洋文庫叢刊第十六・欽定西域同文志・下」が刊行され、講演会は春秋二期十回「東洋学講座」を公開し、研究会は、ロンドン大学東洋アフリカ研究所ライブラリアン、J・D・ピアソン氏、ケルン大学ワルター・ハイシッヒ教授、ブラウン大学リー・ウィリアムス教授を囲む会を含めて十二回を行つた。展示会は朝鮮学会第十三回大会に協賛して、十月十三・十四日、朝鮮本・貴重本類を展示し、国立国会図書館の援助を得て解説目録を印行した。購入図書は単行本・和書八六冊、漢書・朝鮮書一五五冊洋書八〇四冊、定期刊行物・邦文三一二冊、漢・朝鮮文五、洋書一二九冊に及んだ。研究者養成として文部省補助金による研究生二名がある。

また特別事業としては、文部省科学研究費交付金による研究として、三十五年度来行われてきたアジア地域綜合研究・機関研究B「イスラム諸国の社会構造」によつて、図書、マイクロフイルムが収集収蔵せられた。

その他、ハーバード・エンチン研究所、ロックフェラー財団、アジア財団、フォード財団等の外国援助金を得て各種の特別研究が行われている。

主なる動きとしては、四月、前総務部長河野六郎は兼任研究員となり、総務部長として小林吟重郎が就任。六月、北村甫研究員は、ロックフェラー財団の招請により、イタリアに於て開催された国際チベット学会に出席の後、約一ケ月欧米各国のチベット学研究センターを歴訪の後帰国。八月、二月以来メキシコ学院の要請に基き講義のため出張していた榎一雄専務理事兼研究部長が帰国、次いで十月末より、ユネスコの南アジアセンター設立のためニューデリーに開かれた国際会議（十一月二日―五日）に出席すると共に、約三週間にわたり東南アジア諸国の研究機関を歴訪して、十一月下旬帰国した。又、十月末より十一月にかけて約十日間、神田信夫・松村潤両研究員及び岡田英弘研究生は、ハーバード大学の援助により、台北市の国立中央研究院を中心とする台湾における満蒙語及び満蒙文献の調査に従事した。十二月、評議員石黒俊夫氏は理事に就任された。超えて昭和三十八年二月、佐々木正哉研究員は、フォード財団の援助により、ロンドン国立文書館、大英博物館、ロンドン・ミッションにおいて、中国近代史資料調査を、また台北の国立中央研究院において清代教務檔案の調査を行うため出張した。

なお、ハンブルク大学のアンネマリエ・フォン・ガベイン教授は、東洋文庫の招請により、約一ケ年、客員研究員として滞日されるため、九月来日せられた。

前年度に付置せられた、ユネスコ東アジア文化研究センターにおいては、第一の調査研究（社会学関係）に引続き三十七年十月以降ユネスコの承認を得て、第二の、歴史学中心の調査研究プロジェクト『東アジア諸国に於ける西洋文明受容の歴史的背景に関する国際協力研究』(An International Research on Historical Background of East Asian Countries' Acceptance of Western civilization) が、五ケ年計画で発足した。

三　チベット学の現状について（講演要旨）

東洋文庫研究員　北　村　甫

一　最近各分野にわたつて著しい進歩をとげつつあるチベット学について、その全般を概観することは、限られた一分野であるチベット語学を専攻するわたくしの能力を越えたことである。したがつて、ここでは、わたくし自身が参加し、多少事情の分つているチベット研究に関する一国際的プロジェクトの研究状況を紹介し、チベット学の現状の報告にかえたい。

はじめに同プロジェクトの開始から今日に到る経過の概略を述べると、一九五九年十月、イタリアのベラジオ Bellagio にトゥッチ G. Tucci 教授、リチャードソン H. E. Richardson 氏など欧米の代表的チベット学者数名が集まり、インドに移住したチベット人の中から有能な学者を選んで各国に送り、その協力を得てチベット研究を推進させようというプロジェクトを立案した。このプロジェクトに対し、同年末ロックフェラー財団が研究費の補助を決定、それによつてシャトル、ロンドン、ローマ、パリ、ミュンヘン、ライデン、コペンハーゲン、東京にチベット人学者を受け入れる各国のセンターを設けることになつた。一九六〇年十月、プロジェクトの中心となるシャトル・センター、すなわちワシントン大学・Far Eastern and Russian Institute がサキャ派宗家の一族をインドから招聘したのを皮切りに、各センターが相ついでインドからチベット人学者を迎え、それぞれのプランに従つて研究を開

始した。一九六二年七月、再びベラジオにおいて各センターの代表会議 Conference on Tibet が開かれ、各センターの経過報告と、プロジェクトの以後の計画についての協議がおこなわれた。

さて、東京センターは、東洋文庫に設置されたが、わたくしは同文庫から二回目のベラジオ会議に派遣され、その前後約一か月、コペンハーゲンを除く六センターを訪問、各センターの研究の実際に触れることができた。以下、その間のわたくし自身の見聞、およびシャトル・センターのワイリー T. V. Wylie 博士による第二回ベラジオ会議報告書などに基づいて各センターの研究状況について述べよう。

二　ローマ・センター　第二次世界大戦後のチベット学の発展に指導的な地位を占めてきたトゥッチ教授の主宰する中東亜研究所 Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente に置かれ、主なスタッフは同教授とその後継者と目されるローマ大学のペテック L. Petech 教授、招かれたチベット人は、コンボ kong po 出身（一九二六）・ゲルク派セラ寺のゲシェ dge bshes（学位名）と、デルゲ出身（二十六歳）・ニンマ派の活仏の二人。ここでチベット人の協力がもつとも効果を挙げているのは、トゥッチ教授所蔵の茫大なチベット文献の目録作成である。チベット文献の目録作成は、はじめに所要事項を指示すれば、多少経験のあるチベット人学者なら短い時間でかなりの量を処理できる仕事であり、かつ研究者との言語的コミュニケーションをそれほど必要としないから、他のセンターにおいても主要事業としてまつさきにとりあげられた。また、トゥッチ教授はかねてから、西パキスタン西北部のスワット Swat（チベット語 u rgyan）に栄えた仏教とチベット仏教の関係に注目し（Cf. *Travels of Tibetan pilgrims*

in the Swat valley, 1940)、戦後も同地方の発掘によりその研究を進めてきたが、現在ニンマ派の活仏に、彼が目録作成などのために読むチベット文献の中からスワットに関する記述を集録させている。外国人研究者のとうてい及ばない読書力を持つチベット人のこの種の協力もきわめて有効である。その他、同教授には、十六世紀の法律書を資料とするパモドゥップ Phag mo grub 族とツァン gtsang 州との関係についての研究、サキャ派高僧から元帝に宛てた書簡を資料とした当時のサキャ派教理の発展についての研究、マナサロワール Manasarowar 湖周辺の聖地に関するポン教文献の研究などがある。一方、ペテック教授は、清朝・チベット交渉史、ダライ政権の変遷についての研究を進めてきたが（Cf. *China and Tibet in the early 18th century*, 1950）、一九六二年秋からチベット人と協同してダライ政権の確立した五代ダライ（一六一七―一六八三）の時代の研究を始めるとのこと、したがってまたすでに予告のあつた五代ダライラマの「仏教史」の研究もやがて刊行されるであろう。戦後、チベット古代史、中世史の研究は、新資料の発見とトゥッチ教授の *Tibetan painted scrolls* (1949) などにより大いに進んだが、歴史家の関心は現在、五代ダライ前後の時代に移りつつある。なお、両教授により数年来つづけられていたフランケ A. H. Francke 収集の西部チベット関係文献の整理もこのセンターの注目すべき研究の一つである。

三　ミュンヘン・センター　ミュンヘン大学のホフマン H. Hoffman 教授が主宰、招かれたチベット人は、シガツェ近くの出身（一九三一）・ゲルク派・セラ寺の活仏と、カム出身（一九三九）・ゲルク派・セラ寺のゲシェの二人。ここでは、古典チベット語・ドイツ語・英語辞典の編集と、東西ドイツ各地にあるチベット文献の総合目録の作

成が主な仕事である。辞典編集は、すでに一九五四年に始まつているが、現在担当者はバイエル科学アカデミー Bayerische Akademie der Wissenschaften のサンスクリット学者ウィルヘルム F. Wilhelm 博士で、チベット人の協力を得てようやく軌道に乗つてきた。資料としては、ゲシェ・チュダ dge bshes chos grags の〈*brda dag ming tshig gsal ba*〉（「蔵文辞典」北京、一九五七）、「マハーヴュットパッティ」などの語彙集、「デプテル・グンボ」、プトンの「仏教史」などの史書、「賢愚経」「金光明最勝王経」などの経典、ミラレパの「十万歌」〈*mgur 'bum*〉トーマス F. W. Thomas などにより編集された敦煌文書、ボン教文献など各種の文献が選定されている。従来のイエシュケ、チャンドラ・ダスの辞典の欠陥を補い、とくに出典を明確にする方針で、完成にはなお十年を要するとのことである。辞典編集には「マハーヴュットパッティ」の校訂版を準備中のハンブルグ大学のハム Hamm 博士もサンスクリットに関して協力している。文献目録は、すでに完成したドイツ蒙古語文献目録と同じシリーズの一冊として出版される予定で、上記のウィルヘルム氏がドイツ各地の研究者・チベット人と協力して仕事を進めている。ホフマン教授は、ボン教、チベット仏教の研究が主で（Cf. *Quellen zur Geschichte der tibdischen Bon-Religion*, 1950; *Die Religionen Tibets*, 1956）、「時輪タントラ」〈*Kālacakra tantra*〉、パドマサンバヴァ Padmasambhava などの研究に従つている。

四　ライデン・センター　ライデン大学の仏教学者ドゥ・ヨング J. W. de Jong 教授が主宰。チベット人は、ラサ貴族出身（一九二八）・ゲルク派・レプン寺の活仏、チャムド chab mdo 近くの出身（一九二三）・ゲルク派の

活仏の二人。ライデンの民族博物館所蔵で主として Johan van Manen が収集したチベット文献（約千五百点）の目録の作成がもつとも大きな仕事である。同文献の簡単な目録はすでに R. de Nebesky-Wojkowitz 博士により作成・領布されたが、チベット人により内容の紹介を含むより完全なものが作成されるであろう。ドゥ・ヨング教授には、チベット学に関し、ミラレパの「ナムタル」rnam thar（伝記）のテキスト出版（一九五九）などの業績があるが、現在は二、三の仏典の梵本を、チベット人の協力を得て、チベット訳あるいはチベット語註釈書と対比しつつ研究する計画を持つている。ライデンにチベット人が招かれてから、ほかに、数名のインド史研究者、民族学者がチベット研究を始めたが、まだチベット語習得の段階である。

五　パリ・センター　École pratique des Hautes Études のスタイン R. A. Stein 教授とその弟子たちが主な研究スタッフで、チベット人は、タクポ dwag po 出身（一九二三）・ゲルク派の活仏、その従者をつとめているニエモ snye mo 出身（一九二四）・ゲルク派・ガンデン寺の僧、ラサ西北方のダム 'dam 出身（一九一九）・チベット政府の役人とシガツェ出身のその妻、の四人である。ダム出身のチベット人ははじめセラ寺に入つたが後に還俗絵画・音楽、叙事詩「ケサル ge sar 王の物語」の吟誦などにすぐれた才人で、スタイン教授のケサル研究（Cf. *Recherches sur l'épopée et le barde au Tibet*, 1959）その他の口頭文学、祭式・儀礼の研究に役立つている。教授は最近チベット学の好箇の概説書（*La civilisation tibétaine*, 1962）を出版したが、その挿絵は彼の画いたもの。センターとしての主な仕事に、スタイン、ミゴー A. Migot、バコー J. Bacot 諸氏、マクドナルド Macdonald 夫

妻などの個人の蔵書を含めたパリにあるチベット文献の目録作成、東洋文庫から留学した山口瑞鳳氏担当の *Dictionnaire historique et bibliographique* の編集がある。後者は七世紀から十八世紀中葉に到るチベット史に現われる人物・建造物の解説事典で、チベット文献・チベット研究書から約一万の項目が収集されている。個人的研究としては、マクドナルド A. W. Macdonald 氏の「屍鬼物語」ro sgrung の研究が注目される。氏はカリンポン地区、ネパールで民話、土俗資料を採集、とくに「屍鬼物語」の録音テープは数十巻に及んでいる。また、マクドナルド夫人がサキャ派を中心とした中世史を対象として主に〈*rgya bod yig tshang*〉を、山口氏が六代ダライのナムタルとチベット暦を研究しているほか、数人の研究者により、図像学、音楽、敦煌文献、「大方広如来蔵経」などの研究もおこなわれている。

六　ロンドン・センター　ロンドン大学の School of Oriental and African Studies のスネールグローヴ博士が主宰、それにオックスフォード大学のドライヴァー J. E. S. Driver 氏が参加している。スネールグローヴ博士はポン教に関心があり、招かれたチベット人中、カム出身（一九二六）、アムド出身（一九二九）、同じくアムド出身（一九三六）の三人はポン教を修めたゲシェで、他にラサ貴族出身（一九三〇）・チベット政府の役人、ラサ近くの出身（一九三九）・セラ寺の僧侶の二人が招かれた。ロンドンでは、大英博物館のチベット文献、ダブリンのビーティー卿 Sir Chester Beatty 収集文献、一方、オックスフォードでは、同大学図書館所蔵チベット文献、ドライヴァー氏所蔵文献の目録作成が主な仕事の一つで、とくにドライヴァー氏はニンマ派の教理を研究対象とし、「ニンマ・

タントラ全書」〈*rnying ma rgyud 'bum*〉の目録作成と内容分析を進めている。スネールグローヴ教授は数回ヒマラヤ地方とくにポン教寺院のある西部ネパールを踏査、ポン教文献もかなり収集しているとのこと（Cf. *Buddhist Himalaya*, 1957; *Himalayan Pilgrimage*, 1961）、今後ポン教教理の変遷、仏教との関係についての研究を発展させるであろう。ロンドンでは、かつてチベット人を招き、中央チベット語について数編の論文（Verbal phrases in Lhasa Tibetan, *BSOAS*: 16 (1954); The tonal system of Tibetan, *BSOAS*: 17 (1955), etc.）を発表したロンドン学派の言語学者スピリッグ R. K. Sprigg 氏も上記のチベット人によるラサ、カム、アムド諸方言の比較研究を計画している。

なお、英国では、このプロジェクトの推進者の一人であり、第二回ベラジオ会議の議長をつとめたリチャードソン氏の名を逸することはできない。同氏は最近チベット史の概説書（*Tibet, and its history*, 1962; アメリカ版は *History of Tibet*）を出版、同書は、とくにチベット・中国・英国の交渉史に精しく、長年英国代表としてチベットに滞在した経験に基づく記述は現在のチベット事情を理解する上に役立つ。また、氏は一九六一年から六二年にかけシヤトル・センターに招かれ、古代・中世史研究の指導に当つた。

七　コペンハーゲン・センター　ベラジオ会議における同センター主宰者、王立図書館のホーア E. Haarh 博士の報告によると、一九六二年秋、セラ寺のゲシェとレプン寺の僧が招かれ、研究の重点は、テンギュルの利用しうるすべての版を対照できる目録の作成と、テンギュル各部の内容分析に置かれるとのことである。ホーア氏のほか、ヒ

マラヤ地方の旅行家プリンス・ピーター Prince Peter of Denmark and Greece がチベット音楽についての研究をテーマとし、またスウェーデンの言語学者が現代口語を研究する計画がある。

八　シャトル・センター　このプロジェクトの情報センターの役割を果し、ここを通じて各センターの中間報告が配布される。各センターとの連絡には主としてワイリー博士が当つている。招かれたチベット人は、サキャ出身（一九二九）・サキャ派の宗主、カム出身（一九三四）のその妻と子どもたち、弟のサキャ出身（一九三四）の活仏、妻の叔父・カム出身（一九〇五）の活仏である。当然サキャ派の研究が中心であり、若い研究者スミス E. Gene Smith 氏が、〈*rgya bod yig tshang*〉〈*dpa' bo gtsug lag 'phreng ba*〉〈*deb ther dmar po*〉、クンガ・リンチェンkun dga' rin chen の「ナムタル」などから初期のサキャ派の歴史に関する資料を収集、ワイリー氏が後期を担当、とくにサキャ派とラサ政府との関係を研究、また、スミス氏はサキャ派関係文献の調査を目指し、各センターを歴訪した。両氏のほか、アムド出身のアメリカ人エクヴォル R. B. Ekvall 氏など多数のスタッフにより各分野の研究がおこなわれているが、別のプロジェクト、すなわち National Defense Education Act に基づく言語プロジェクトとして進行中の現代チベット語の記述的研究が注目される。李方桂教授、とくに実際の調査・分析は弟子の張琨教授夫妻が担当、そのために別にラサ出身の男女一人ずつが招かれている。その成果はやがて、Spoken Language Series と同様の形式で発表されるであろう。

九　東京センター　東京センターの研究については、すでに「東洋学報」四四巻一号に計画の概略を紹介した。センターは東洋文庫に置かれ、榎一雄教授が主宰、スタッフは同文庫チベット研究室の多田等観師、金子良太氏、北村甫のほか、一九六一年秋より京都大学・佐藤長助教授、大谷大学・稲葉正就教授、一九六二年四月より京都大学・西田竜雄助教授が参加している。招かれたチベット人は、ラサ貴族夫人（一九三五）・ツェリン・ドルマ Tshe ring sgrol ma.、ラサ出身（一九三三）・サキャ派ゴル ngor 寺の活仏ソナム・ギャムツォ bsod nams rgya mtsho.、ヤクデ g'yag sde 出身（一九二一）・ニンマ派の学僧ケツン・サンボ mkhas btsun bzang po の三氏。主な研究課題は㈠現代チベット語の記述的研究、㈡古代・中世チベット史の重要文献の研究、㈢ラマ教新旧両派の比較研究の三項目であり、同時に東洋文庫・東京大学所蔵チベット文献の目録作成、十三代ダライの「ナムタル」の研究が進行中である。㈠は、西田氏、北村の担当、現代チベット語辞典の編集を目的とし、㈡については、金子氏が土観ラマの〈*grub mtha'*〉、〈*sba bzhed*〉、佐藤、稲葉両氏が〈*deb ther dmar po*〉を担当、それぞれの文献の訳註書が作成される。㈢は多田師の担当、従来わが国において不明の点の多かつたラマ教旧派のうち、サキャ派についてチュ・ナムギェ chos rnam rgyal の、ニンマ派についてはロンチェン・ラプジャンバ klong chen rab 'byams pa の教理概説書により両派の教理が解明されつつある。

十　以上、各センターの主なスタッフとその研究を外面的ではあるが紹介してきた。このプロジェクトの開始以来、チベット人の協力により、各センターにおいて相ついで未開拓の分野の研究が開始され、また各研究者はこれまでの研究上の多くの疑点を解決することができた。さらにこのプロジェクトを通して、ややもすれば閉鎖的であった各国

の研究者が、協力体制について真剣に考え始め、第二回ベラジオ会議においても、文献交換のための国際的センターの設立や、個々の研究に関する協力の提案などが熱心に討議された。すでに同会議を契機として、一部センター間の文献交換や、上記山口氏編集の事典に対する各センターからの資料の提供などは、実現に向いつつある。こうした状況は今後のチベット研究の進展に大きな希望をいだかせるものであるが、チベット人の協力をより効果的なものとし、チベット学が飛躍的な進歩を遂げるためには、なによりもまず、研究者とチベット人の間のそれぞれの口頭語によるコミュニケーション上の困難が早急に克服されなければならないし、またそれに関連して、同一のセンターに招かれたチベット人相互の、あるいはチベット人と研究者の間の人間関係の調整、チベット人の新しい環境への適応の促進など、研究を支える生活的基盤を安定させることにさらに日常的に腐心しなければならないであろう。

四　職　員

理事会　理事長　細川護立（文化財保護委員会委員）

専務理事　榎一雄（財団法人東洋文庫研究部長　東京大学教授）

理事　有光次郎（株式会社吾嬬製鋼所取締役会長）

石黒俊夫（三菱地所株式会社会長）

岩井大慧（国立国会図書館支部東洋文庫長）

渋沢敬三（日本民族学協会々長　国際電信電話株式会社会長）

徳川宗敬（日本博物館協会々長　日本図書館協会顧問）

松本重治（国際文化会館専務理事）

山本達郎（東京大学教授）

和田清（日本学士院会員　東京大学名誉教授）

監事　岡東浩（東山農事株式会社常務取締役）

評議員会　評議員　磯野長蔵（株式会社明治屋会長）

梅原末治（京都大学名誉教授）

大浜信泉（早稲田大学総長）

茅　誠司（東京大学総長）
小泉信三（日本学士院会員）
新村出（日本学士院会員　京都大学名誉教授）
高橋竜太郎（協和発酵工業株式会社取締役）
高村象平（慶応義塾大学総長）
平沢興（京都大学総長）
俣野健輔（飯野海運株式会社々長）

総務部
部長　小林吟重郎
参事　平野豊　松前義治　箕輪友吉
助手　奥島久仁子　佐野五一　高野尚子
田口幸子　竹内サクノ
技能員　秋元美恵子　池田直人　一瀬美恵子
児野寿満子　長本一恵
作業員　石井浜吉　臼倉豊松　勝間勇次郎
熊田信次郎　染谷コウ

図書部
部長　岩井大慧

司書　石黒弥致　宇都木章　片桐一男
　　田川孝三　森岡康　渡辺兼庸
司書補　大沢仁子　竹之内信子　秩父良子
　　寺山祐子　村越晃

研究部
部長　榎一雄
研究顧問　岩井大慧
　　岩村忍（京都大学人文科学研究所教授）
　　梅原末治
　　辻直四郎（日本学士院会員　東京大学名誉教授）
　　原田淑人（日本学士院会員）
　　村田治郎（京都大学名誉教授）
　　山本達郎
　　和田清
東洋学連絡委員会委員　岩井大慧
　　梅原末治
　　榎一雄

金倉円照（東北大学名誉教授）
杉本直治郎（広島大学名誉教授）
鈴木　俊（中央大学教授）
塚本善隆（国立京都博物館々長）
辻　直四郎
仁井田　陞（東京大学東洋文化研究所教授）
原田淑人
福井康順（早稲田大学教授）
松本信広（慶応義塾大学教授）
宮崎市定（京都大学教授）
村田治郎
山本達郎
吉川幸次郎（京都大学教授）
和田　清

名誉研究員

P・ドゥミエヴィル（コレージュ・ド・フランス教授）
S・エリセイエフ（ソルボンヌ大学教授　前ハーヴァード・エンチン研究所所長）

W・フックス（ベルリン自由大学教授）
B・カルルグレン（前スウェーデン王立極東古代博物館長）
E・O・ライシャウァー（ハーヴァード大学教授　駐日米国大使）
W・サイモン（英国学士院会員　ロンドン大学教授）
G・トゥッチ（ローマ大学教授　イタリア中東亜研究所長）

研究員　菊池英夫
北村甫
佐々木正哉

研究員（兼任）青山定雄（中央大学教授）
荒松雄（東京大学東洋文化研究所助教授）
市古宙三（お茶の水女子大学教授）
岩生成一（日本大学教授）
梅原末治
神田信夫（明治大学教授）
河野六郎（東京教育大学教授）
佐伯富（京都大学教授）

末松保和（学習院大学教授）
鈴木俊（中央大学教授）
周藤吉之（東京大学教授）
関野雄（東京大学東洋文化研究所助教授）
田中正俊（横浜市立大学助教授）
鳥海靖（東京大学助手）
中嶋敏（東京教育大学助教授）
藤枝晃（京都大学人文科学研究所助教授）
松本信広
松村潤（日本大学助教授）
三根谷徹（東京大学助教授）
護雅夫（東京大学助教授）
山根幸夫（東京女子大学教授）
山本達郎

研究生

岡田英弘　金子良太　酒井良樹
鶴見尚弘　山口瑞鳳

助手

草野祐子　国岡妙子　敷地望

白川邦子　杉野純子　二瓶幸子

平工俊江　平原昌子　広瀬洋子

藪陸奥子

五　事　業

1　刊行図書

満文老檔研究会訳註『満文老檔』Ⅵ（太宗4）　東洋文庫叢刊第十二　昭和三十八年三月B5判　四〇〇頁

『欽定西域同文志』下冊　東洋文庫叢刊　第十六　昭和三十八年三月　A5判　五二五頁

東洋文庫欧文紀要 Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko. No. 22, (1963). B5判　一五〇頁

Kazuo ENOKI 榎　一雄：The Castle Town of Lou-lan and the Date of Kharoṣṭī Inscription.

Kaizaburo HINO 日野開三郎：Government Monopoly on Salt in T'ang before the Enforcement of the Liang-Shui-fa

Akira HIRAKAWA 平川　彰：The Rise of Mahāyāna Buddhism and its Relationship to the Worship of Sūtras.

Shōju INABA 稲葉正就：The Lineage of the Sa skya pa — A Chapter of the Red Annals ——.

近代日本研究室編『東洋文庫所蔵近代日本関係文献分類目録—和書・マイクロフィルムの部—』第二分冊　昭和三十七年十二月　B5判　三一四頁

近代中国研究センター編『東洋文庫近代中国研究室欧文図書目録』昭和三十七年十一月　B5判　六七頁

『昭和三十六年度財団法人東洋文庫年報』昭和三十七年十二月　A5判　一二四頁

2　講　演　会

東洋学講座

春期

第百五十二回　昭和三十七年五月三十日

「第三世パンチェンと乾隆帝」　東洋文庫研究員　多田等観

第百五十三回　昭和三十七年六月六日

「楽浪の印と封泥―『漢委奴国王』金印に関連して」　奈良国立文化財研究所研究員　榧本杜人

第百五十四回　昭和三十七年六月十三日

「鳩摩羅什論」　京都国立博物館々長　塚本善隆

第百五十五回　昭和三十七年六月二十日

「東洋における毛筆の発達と書画様式の関係」　早稲田大学教授　安藤更生

第百五十六回　昭和三十七年六月二十七日

「大秦国の妙薬」　慶応義塾大学教授　前嶋信次

秋期

第百五十七回　昭和三十七年十月十七日
「チベット学の現状について」　東洋文庫研究員　北村甫

第百五十八回　昭和三十七年十月二十四日
「朝鮮の貢納について」　国立国会図書館支部東洋文庫司書　田川孝三

第百五十九回　昭和三十七年十一月十四日
「古代バビロニアの紀年について」　中央大学教授　板倉勝正

第百六十回　昭和三十七年十一月二十一日
「古代エジプトの政治」　東京教育大学教授　杉勇

第百六十一回　昭和三十七年十一月二十八日
「イスラエルの宗教と文化」　東京教育大学助教授　関根正雄

講演要旨

パンチェンラマ第三世と乾隆帝

一　パンチェンと東インド会社の関係　多田等観

チベットがおもてむきにインド政府と交渉を持つようになつたのは十八世紀後半と考えられる。そのころブータン

がその強い武力をたのみにインド平原に下りクーチビハールに侵入した事件があつた。その当時のブータンはチベットの属領で、重要な政治上の問題はチベット政府の支配をうけておつたもののようであり、ブータン人はクーチェ・ビハールでその国王を俘虜にし、一時国土を占領した。ビハールではその救援を隣接しているベンゴール州に頼んだのである。ベンゴールは既に東インド会社の勢力下にあつたので、この事件は同会社として境を接する地域の治安上の大問題として無関心であり得ない。

これについて、チベットのパンチェン・ラマ第三世パルデン・ロサンエシェが東インド会社初代総督ワーレン・ヘスチングスに書をおくり、ブータン人の無謀な行動に謝罪するとともに、相互の武力争闘を止めるように申し出た。その理由として、チベットは仏教国であるので、チベット人は仏陀に仕え、仏陀の道を修行する者ばかりであるので戦を好まないことを告げ、これによつてブータン人は自国の領土内に止まり、みだりに平原を犯かさないことを約束し一応この事件の終りを告げたのである。もつともこの時代（約一七七〇年）はチベット政府ではダライラマ第八世ジャムペル・ギャムツオが幼少で摂政が居つて宗教政治の諸問題を処理しておつたが、このような国際的な大問題をどうしてよいのか当惑にくれておつた。そこでダライ・ラマの師匠格のパンチェンが進んで和解をかつて出たのである。

東インド会社総督ヘスチングスはこの機会を利用して、未知の国チベットの政治、経済や民族の宗教・慣習などのいろいろの事情を明らかに調査しようと考えた。そこで彼の秘書ジョージ・ボーグルを使節として入蔵させようと計画した。ボーグルはヘスチングス総督の親書やさまざまな贈りものを携え、先ず、ブータンの首都に赴き、それからヒマラヤ山中に入りチュンビー渓谷に沿うてチベット本土に進み、シガツェのタシロンプ寺に到着したのは一七七四

年秋のことであつた。タシロンプ寺はパンチェン・ラマの住んでいる寺である。ボーグルは直ちにパンチェンに会い事件の顚末を次のように報告した。

クーチェ・ビハールはベンゴール州とその境を接していること、ブータン人は山岳に住んでいて度々交易のため平原に出て来るが、それまでは頗る穏かな善良な民族であること、今度は武装した数千人のブータン人が来襲しビハール国土を占領し、ビハール王を俘虜として連れ帰つたこと、ビハールと境を接するベンゴール州を領する東インド会社としては治安についての対策を講ずる必要のあることは勿論、ビハール国住民救援のためにも出兵を余儀なくした。時あたかもパンチェン・ラマから親書があつたので攻撃を中止し、ブータンと和平の方法を講ずるに至る次第を詳細に報告した。彼はその年越冬し翌年にわたり同寺に逗留し、屢々パンチェン・ラマとも会い、諸種の事情を研究した。パンチェンは初めのうち彼等は異教徒であるし、チベットに対して大きな野心をいだいている猜疑心から容易に心を許さなかつた。しかし、イギリス人はかねて想像したような好戦的でなく、平和的な立派な紳士として友情を持つ人々であるとし、彼等の行動に善意な理解を持つようになつた。そうして、ボーグルの意見に傾聴するようになつた。ボーグルはまたチベット・ベンゴール間の通商に関するを話を進めた。しかし、パンチェンは通商に関するような政治上の問題はラッサのダライラマ政府の摂政の権限であつて、自分はただ念仏して座禅をし学法を仕事とするのみであると逃げた。ボーグルはまた極めて巧妙に乾隆帝に対するチベット人の尊敬やシナの国力の過信に水をさした。かようにして、彼はチベットをシナの勢力下からひきはなし、東インド会社へ転向させようと試みたのである。

ボーグルがチベットに来たことにつき、ラッサのダライラマ側の要人は甚だ喜ばない。チベットもインド同様異教

徒に併呑されて仕舞うのでなかろうかと憶測した。パンチェンからボーグルをラッサ政府に紹介する書面を出し、ラッサに赴くための工作をしたけれども、その旅行すら成功しなかつた。

二　パンチェンと乾隆帝

シカツエに於けるボーグルの対パンチェン工作につき、ラッサ駐在のシナの駐都大臣から詳細にわたつての報告が乾隆の手許にされた。これについて乾隆は全々無関心であり得なかつた。それから二、三年後一七七七年乾隆の特使がパンチェンに派遣された。帝の親書に数多い貴重の贈りものを添えられた。而して、パンチェン・ラマが是非北京に来臨するようにと懇請されたのである。寿七十歳に達したが生存中パンチェンに面会し有難い法を授けてもらい、それを冥土の土産にさせていただきたいとのことであつた。パンチェンはこの熱烈な招待にはあまり心が進まなかつた。ラマを守護する神の指示を仰ぐこととした。その神託によると、東方への旅行は危険があるというので、乾隆の使者に対し北京行を固辞した。しかし、なかなかそれを聴きいれてくれなかつた。翌年また翌々年と使者を派遣し、今生に於て活仏のあなたに会いたいからと重ね重ね要請された。そうして北京までの旅行に要する馬疋や食糧万端の準備をした大部隊を派遣して来たので、どうしてもことわることができなくなつた。

一七七九年の夏、パンチェンは二千名の随員を従え、タシロンプ寺を出発した。約二ケ月の行程の北方チベットを横断した。途中で乾隆からさしたてられた接待員や、立派な轎の出迎えを受けた。斯うして順路クンブムに到着した。蒙古の巡礼者がなすように青海湖畔で越冬し凡そ四ケ月間滞在した。やがて春気が催ほすころ東方に向つて蒙

古横断の旅をした。帰化城、多倫諾爾を経て熱河に到着したのは一七八〇年七月のことであつた。タシロンプ寺を出発して約一ケ年の月日がかかつた。乾隆はパンチェンを迎えるために北京から承徳の離宮避暑山荘に行幸された。乾隆は彼のために熱河にチベットのタシロンプ寺を模した栄美豪壮な寺院を建てて歓迎した。須弥福寿廟とも行宮廟とも称される寺である。熱河の離宮で皇帝と会見したが、そのときの模様を清朝実録等には、パンチェン・エルテネはチベットから承徳に到着し澹泊誠敬殿（離宮の正殿）で皇帝に跪拝し忠誠を誓つたと誌されてある。また一方、チベットの文献にはそれとは反対の記述がされてある。即ちパンチェン第三世僧上帙に皇帝はラマに対し灌頂大阿闍梨耶として恭敬尊重し座下に礼拝し、且つは遠来の労をねぎらつたと書いてある。けだし、一は地上の大王としての権力者であり、他は法界の大法王導師としての威厳を表明したものであろう。

かようにして東西の二大権力者の会見にはいろいろな談話が交換された。談たまたまインドのことに及んだ。パンチェンはヘスチングスは皇帝に比すべき強力な支配者であることを述べ、皇帝と彼との交友関係を結ぶように希望した。皇帝はそれには大に興味を感じたように装い、ヘスチングスの人物や、領土の広さ、その国の風俗習慣に至るまで詳細な質問を試みられた。皇帝は東インド会社と新たな交渉を結ぶについてはパンチェンからヘスチングス総督に紹介してくれと頼んだという。当時世界最高の権勢をほこる大清帝国の皇帝から、東インド会社のような一商事会社と交際しようなどとは考えられない事である。皇帝はパンチェンに先だつて北京に帰つた。それから間もなくラマは北京に迎えられ、宮殿に皇帝を訪問し、舎宿の黄寺（ダライラマ第五世のために建てられた寺）に入つた。また雍和宮でパンチェンが大導師となり大法要を行つたとき皇帝が親しく参詣するなど頗る殷懃をきわめた。ラマが北京に来て

から健康を害ねたようである。皇帝が病床に駆けつけたとき、最早臨終がせまつていた。ラマ教信者の驚きは想像に余りあるものがあつた。皇帝は信者と悲しみを共にし、喪服を着けラマの遺骸に涙の礼拝をした。皇帝のこの敬虔な態度がラマ教徒はいうに及ばず西域地方の諸民族を乾隆の政権下に結び付けるのに大きな効果があつた。パンチェン対ヘスチングス即ちチベットとインドとの関係についていだいていた乾隆の疑心暗鬼が完全に解くことが出来た。これがためパンチェンは大きな犠牲者となつたともいい得るであろう。

鳩摩羅什論

塚本善隆

儒教古典を権威とする教育をうけ、中華優越、胡族蔑視の思想感情の流れている中国知識人官僚によつて編纂せられた中国の歴史には、元来宗教について記すこと少く、いわんや外来宗教や外人宗教家の為に記載をのこすことは極めて少い。もし歴史の中に立伝せられている外国僧ありとすれば、よほど中国社会殊に治者階層にも大きな影響を与えた人である。晉書に立伝せられた鳩摩羅什はそのような異色の外来僧である。しかも彼は晉の都にきて漢族王朝に関係をもつて活動したものではなく、いわゆる五胡十六国の一つである後秦王姚興に迎えられてその後援下に長安で仏典翻訳事業をなしたものであるが、その翻訳仏典について晉書は「今行はれている仏典は多く羅什の訳である」とのべている。現在の晉書は唐の太宗が古い晉書によつて補修編纂したものであるから、この「今」の語が古い隋書に存した語が、太宗の時をさす語かはにわかに決定できないにしても、中国仏教史の事実は確かに羅什活動時代すなわち東晉末期から南北朝隋唐初まで、南北シナを通じて羅什の新訳仏典が最も研究せられ讀誦せられるシナ仏教の指

導仏典となり、中国仏教発展の根幹となつたものである。羅什の長安入りは、たといそれが胡族の王朝であつたとしても漢族の宗教界にもまた社会の諸方面にも極めて大きな影響を与えているのであつて、ここに晋書が彼の伝をのせた所以がある。

さて羅什の卒年は、弟子僧肇の羅什法師誄に癸丑年（四一六）七〇才卒とあるのによつて明かのようで多くの学者もこれによつているが、実はこの誄は必ずしも信用できない。詳しいことは「肇論研究」にのせた拙論にゆずるが、羅什教団によつて長安から追放せられたインド僧仏陀跋陀羅が南遷して劉裕と荆州で会見（四一二）した史実や羅什伝の「三五才破戒」の説話の検討などから、四〇一年に長安に迎えられた羅什の宣教活動は、四〇九頃に終つた（必ずしもこの年に死んだとはいはぬが）と認めてよいと思う。羅什は、亀茲でインドの亡命貴族と亀茲王妹帛氏との間に生れたとされる。当時の亀茲は南道の于闐と並んで西域北道の有力な国でその勢力圏は西は罽賓（カシミール）と接するほどであり熱心な仏教国であつた。その仏教も自然、カシミールの仏教と直結していた。カシミールの仏教は小乗一切有部派（阿毘曇学派）が全盛であつた。亀茲国仏教もこの一切有部系の小乗仏教によつて指導せられていたもので、このことは羅什が長安へくる直前の頃に亀茲に留学した中国僧が書いた「比丘尼戒本序」に、明かに記されている。また法顕が丁度羅什と入れ違いに亀茲を通つてインドに向うが、彼も亀茲周辺の国は「皆小乗也」といつている。羅什はこのような小乗仏教国に生れその深い信者であつた母に伴はれて小乗仏教の根拠地カシミールで一切直部派の学者について学んだが、やがてカシミールを去つてから新興の大乗に転向し、亀茲に帰つて王新寺で小乗全盛の仏教界に処していろいろの圧迫に抗しながら専ら大乗の宣揚と研修につとめて、小乗仏教国で小乗を批判する王新寺の若い大乗

学者として名を知られる特異の存在になつていたことは、前記の比丘尼戒本序も記している。

さて羅什の長安入り前後の時代の中国仏教界は、道安—慧遠の師弟に代表されるが、これらの中国人の仏教指導者の仏教は二本の伝来仏教の足——安息の安世高らが伝へた仏教＝小乗仏教と月氏の支婁迦識らが伝訳した大乗仏教と——の上に立つていた。しかし原地に於いて大乗仏教が如何にして小乗仏教に反対して興起したかを明かにしていない中国人は、安世高と支婁迦識の訳経の「仏説」の語を素朴に受容し信受して相対立する二原の仏教を共に一人の仏の説法と受容していた。もつとも道安——慧遠の仏教々学の比重は、彼等を育成した中国の学術思想界に流行していた老荘思想を媒介としてそれに近似した「本無」「無」「空」などの訳語で空観による般若智の体得を強調している般若経や維摩経及び法華経などのインド初期大乗経典により多くかかつていた。換言すれば数本の訳を重ねている大乗の般若経学がこれら中国仏教指導者の仏教学研修の中心をなしていた。けれども性質の異る文学言語から漢訳された般若経を原語を離れて解釈する中国人の般若学には異義紛出を免れず、而しその中国人相互の異義の解消は原語とインド般若学に十分な学殖をもつ外来僧の権威による以外に方法のない情勢にあつた。羅什はこのような時にインド般若学の権威として迎えられた。この羅什の長安における翻訳新仏教が長安に孤立せず急速にほとんど全中国の指導仏教として広まつたのには、いくつかの好条件が重つていた。第一に彼は亀茲から捕らえれて中国にきたが長安入りまでに甘粛で軟禁十八年の生活を送つた。これは宣教者として極めて不幸のようであつたが、逆にこの間に外来宣教者として第一要件である漢語に通じ従来の漢訳仏典にも若干の知識をもち得たのみならず、彼に終始期待しその大乗学の第一の理解者であり宣揚者ともなつた長安生れの優秀僧肇を側近の弟子として同伴して長安入りをすることが

できた。その上に長安における彼の新翻訳事業は在来の翻訳が個人の事業として行はれたのに対し、これは安定期に入つた姚秦国王が企画し要請する国家事業として行はれ、随つて経済的にも協力の人的要素に於ても従来に見ない完備したものであつた。特に、協力者については姚秦王は羅什の来朝を広く中国仏教界に弘報しかつ新訳事業の為に各地の仏教学者の参会を要請した。時は中国が漢胡の王国分立時代であつたけれども、伝来仏教が急速に興隆しつつあつた時でもあり、宗教界は政界のような対立敵視の感情も少く、国境をこえて南北全仏教界から羅什新訳事業に参加し教をうけようと仏教界の有力者が長安に集つた。更に羅什の新訳事業が未伝来の経の新訳でなく、先ず既に当時の中国仏教界の中心仏典として広く読誦せられまた熱心に研究せられ講義せられるに至つていた旧訳の最重要仏典、般若経、維摩経、法華経などの過誤を訂正する再訳であつたことは、注意を要する。換言すれば最高の大乗教学の権威者による流布重要大乗仏典の最良の決定本が出ることになつたのである。而もその再訳に当つて羅什はその改訂の理由を示し、また原語を知らぬ中国学者がもつていた疑問の意義を解明したのであるから、長安の訳場では全国から集つた般若学、維摩学、法華学が羅什の権威によつて帰趣する所を明示せられて、中国仏教の指導経典の決定本とその専門学者を大量に同時に育成したのである。般若経の再訳には五百人の諸宿旧義学沙門が列席して羅什に示される義旨を詳かにしたのみならず、羅什はインド大乗学の最高の権威竜樹により作られたという般若経の詳蜜な註釈書大智度論一〇〇巻を経と並行して訳出したのであるから、中国仏教界にはこれからはこの権威の解釈をはずれた異説は当然に否定され解消されざるを得なくなつた。また維摩経の改訂訳場には千二百人の中国教義学僧が、法華経の訳場には約三千余人が参加し、聴受領悟の僧八百余人、智これ諸方の英秀、一時の傑なりと記されている。新訳大乗経はかく

の如き多数の専門教義学者を同時に育成して、これらが長安に孤立せず、それぞれの在来の活動地へ新訳経とその権威者として分散して帰り行きその仏教界の指導者となつて行くわけである。かくて羅什訳大乗仏典は直ちに羅什の行かなかつた中国の全土に強い権威をもつて速かに拡大し流布したのである。

長安の羅什仏教の中国全土への速かな拡大の中でも興味深くまた後の中国仏教発展に注意すべきは、江南の漢族知識人への流伝である。羅什生前に早くも密接な教義上の交渉をもち羅什の指導を文書を通して受容したものは廬山の慧遠を中心とした知識層僧俗仏教徒の集団である。慧遠は勿論道安の般若学を継承し研修する、従つて大乗教義に傾斜度の強い仏教指導者の第一人者であつたが、また同時に新来の小乗阿毘曇の教学にも特に禅定の実践戒律の厳守を中心に強い関心をよせていた。而も大乗、小乗が相対立し相非難する教団の教義であることは、師の道安と同様に明確に知つていなかつた。この慧遠即ち当時の漢族仏教徒の最高の指導者は教義上の疑問に対して羅什—自ら小乗仏教界で僧となり修学しながらこれをすてて大乗へ転じ大乗こそ真仏教と確信し宣揚する仏教求道歴をもつ大乗学者から、小乗教義は仏陀の教義を誤り解するに至つたものであると明らかにきびしい言で文書をもつて指摘して指導せられた。中国仏教界が同時に並べ受容してきた小乗と大乗との二乗仏教が明確に区別せられたのみならず、中国仏教が大乗仏教へ進まざるを得ない指導が与えられたわけである。中国人仏教を大乗たらしめる指導力は、羅什門下の英才僧肇を始め慧遠門下から羅什の新訳場に参加した道生等の学者が加はることによつて一層強加せられた。

羅什系仏教の江南への大量移動は羅什歿後にも政界の変化によつて起つた。『水経注』に見える寿春の導公寺は、従来の「水経注」学者が注意していないが、これこそ羅什歿後の羅什系仏教が長安から大量に移つてきた羅什系大乗

仏教のセンターであり、而も南朝宋の創業主劉裕に直結し、随つて宋朝の都建康を始め宋治下の要地に進出する羅什仏教の源泉となつたものである。劉裕は討伐を行つて長安を占領し姚秦を滅したが、急きよ南帰せねばならなくなつた。この北伐に長安の事情に明るい人としてかつて羅什門下に学んでいた慧厳を伴つて行つたが、慧厳は長安に入つた劉裕に羅什歿後の長安仏教界の有力者であつた羅什門下の僧導を推薦した。劉裕はまだ年少であつた一子義真を長安に留めて急ぎ南帰するに当つて義真の保護を僧導に委嘱した。劉裕が長安を去ると間もなく赫連勃々が長安を占領し義真は身をもつて逃れた。僧導は門下を率いて義真を追う胡騎の隊を一喝して義真を劉裕の根拠地寿春に送りとどけた。劉裕は大いに感激して導公寺を建立して僧導とその門下を安住せしめ、かつ僧導を優遇して劉裕一家の子弟の師たらしめた。他方長安では残忍な赫連勃々の占領は仏教徒への迫害をも伴つたので、長安の仏教徒は避難地を求めて南するものが多かつたが、彼等の中には寿春の僧導をたよつて導公寺に到るものが多く、僧導はこれらの人々を厚く迎え容れた。勿論この寺の建設者劉裕、今や宋の帝位に昇る宋朝創業主の援護があつたことはいうまでもない。宋初その高祖が建立した寿春導公寺は羅什門流の長安仏教徒が多数に移住して羅什が熱心に伝えた大乗仏典、殊に竜樹系大乗教学の研究と宣布の中心となつた。南朝仏教が先づ竜樹——羅什の大乗仏教によつて興隆する所以である。陳隋の間に江南に成立したシナ大乗諸宗、天台宗は羅什訳法華経により、三論宗は羅什が自らの宗としてインド竜樹教学によつて成立したものである。かくて羅什はシナ、日本の仏教諸宗の祖と仰がれる地位を得たのである。

本講演の詳細価は東京大学の結城教授と九州大学の干潟教授の頌寿記念論文集に前篇後篇に二分して出しておいた。また導公寺の羅什仏教については福井康順博士の頌寿記念論文集に論述しておいた。

東洋に於ける毛筆の発達と書画様式の関係

安藤更生

すべての造型美術は器具を用いて作られるが、その器具はそれぞれ用法に適応の限界があり、美術様式はそれに制約される。その結果、新様式の創造発展は旧い用具が適応できなくなつて、新器具の発達を促し、逆に新器具の発達が新様式の発達を促す。これは見易い道理であるが美術史研究で案外見落されている。

今日は紙墨の問題を他日に譲り専ら毛筆の場合についてのべる。今から約二十五万年前旧石器時代のアルタミラ洞窟画においても獣毛を束ねた一種の筆の使用されていたことを思えば、毛筆の歴史は極めて古い。中国において普通蒙恬が筆を発明したとされ、晋の張華「博物志」佚文に蒙恬造筆説が見えているから、既に晋頃にはこの説が一般化していたらしい。これに対し、晋の崔豹「古今註」下・問答釈義においては、蒙恬は筆の発明者ではなく、単に新様式の筆を作つたにすぎず、一種の改良であると説いている。たしかに筆の発明は中国に特殊なものではない。又遺物の上からも亀甲獣骨文字に混つて玉器・陶片に明らかに墨朱を以て記された、刀刻に非るものがある（中央研究院殷墟第五次発掘、董作賓「甲骨文断代研究例」）。従つて紀元前十三・四世紀頃に既に中国人に毛筆が用いられていたことが推測される。写真に拠ればかなり腰の強い毛の筆で、殷墟出土の獣骨と考え合せて恐らく鹿毛であつたらしい。筆の確実な遺物は、長沙の楚国の戦国墓出土品である。一九五四年七月九日「大公報」によると、長沙郊外左家山出土のものは軸五寸五分、毛八分（営造尺か）、軸端を割いて毛をはさみ糸で巻く。兎毛の単毫であるという。これが最古の遺物で、なお別の戦国墓からは書かれた文字の実物が出ている。これはいわゆる楚帛書で、現在ニューヨークのコックス・コレクションに収められている。篆書の一種だが既に一種の波磔が現われ、隷書に近よりをみせ

る。又もう一つ、長沙南門外仰天湖戦国墓出土の竹簡四十二片があつて、やはりやや右上りの扁平な書体ながら横画に後世の隷書に似た波磔がみとめられる。

紀元前三世紀頃になると秦の統一と共に、宰相李斯により文字の統一が行われた。この文字がいわゆる秦篆(小篆)である。その遺物としては泰山・瑯琊石刻があるが、それには一種の主観的個性的表現(筆意)らしきものが既にあらわれてきている。これは明らかに毛筆の変化を推定させ、秦代における毛筆の改良を推測させるに足る。蒙恬造筆説話はこれと照応するが、更に長沙筆は単毫であつたのに、漢代に入つて居延から出土した筆を見ると鹿又は兎毛に羊毛を加えた兼毫であるという。蒙恬造筆説話はあるいはこの兼毫筆の発明と結びつくのかもしれない。篆書であれば楷行草とは比較にならぬ粗雑な筆で書ける。このことから篆書様式の成立当時の筆は可成り未発達のものと推定される。又普通紀元前二世紀漢代になつて隷書が生れたといわれるが、楚簡や楚王豆などに見ると既に紀元前三世紀以降隷書的な筆つきが成立してきていたことがわかる。こうした波磔を伴つた様式は、はじめは篆書の崩れた形式であつたとしても、それを美しく書こうとすると、当然様式化すると共に、筆の発展が促がされることになる。

漢代になると居延から筆の実物が出ている。馬衡「記漢居延筆」(国学季刊、三―一)によると、木軸を四つ割りして毛を挾み糸で巻く。毛は比較的短かく(一、四八糎)もとは先が尖つていたらしい。兎羊兼毫である。漢の隷書様式を生んだのはこの筆である。

東洋では昔から書を芸術としたが、西洋では文字を符牒としてしか考えられなかつた。その一原因は文字を書くのに毛筆を用いたか否かにある。西洋流の器具では一様の線を引くには便だが、客観的な線になつて筆者の主観的感情

の表出に適さない。毛筆はそれに適する。表出の抑揚において主観的個人的感情・個性の表現が可能になると、それが洗練されて芸術化する。

唐代の筆は中国には実物がない。しかし幸いに正倉院に十七本の奈良朝筆があつて資料となる。これらは穂先が長短三種に分れる。いずれもいわゆる「椎の実筆」で、紙心の巻き筆であり、墨は穂先だけにしか付かぬ。従つて線を引いても抑揚の少い鉄線描になる。書の方から云つても七・八世紀半、玄宗開元・天宝頃までは王羲之風の様式となつているのはここに関係する。

唐に先立つ六朝の筆も実物はないが、北魏竜門の始平公造像記や劉宋の爨竜顔碑をみると、日本の奈良朝写経と同じく穂先の角度の強い筆であつたことがわかる。ところが唐中期以後、書画様式が変る。呉道子が出て肥瘦のある抑揚ある線を以て鉄線描を破つた。呉道子の真蹟は不明だが正倉院の墨画麻布は明らかにその流で、これらは前記の穂先の長い筆を用いていると思われる。やがて唐末から水墨画が生れてくる。それまで墨は輪廓線のみであつたのが、色面的に用いられるに到つたのだが、これは一本で線も引ければ平塗りもできるという筆が要求されてきたことを意味する。新様式は新しい筆を要求した。書においても王羲之に代つて顔真卿が現われてくる。彼の用筆はよくわからぬが、その後継者たる柳公権については、彼の使用した筆についての史料があつて、新様式とその用筆との関係をうかがわしめる（宋・呉曾「能改斎漫録」）。しかし彼の場合もまだ穂先が長いとは云つても巻き筆である。だがこの頃になると世の書家が一般に長い筆を要求し出した。日本の空海も、その手紙や「試筆法」の中で長鋒の利をみとめている。そして宋代になると今日の水筆へと変つてくる。この種の毛筆は北宋中期、熙寧頃から用いられるようにな

る。これを最も喜んで用いたのは黄山谷で、この頃になると筆職人の名もかなり伝わり、陳氏・諸葛氏・李晟等の名が伝わつている。いずれも唐以来の造筆家であつて巻き筆として次第に長い穂先のものを作つていたに相違ない。それが熙寧頃に到つて突序新しい形式の筆が出現してきた。葉夢得「避暑録話」上に云う無心散卓筆である。それが今日の水筆と同一かどうかはわからぬが、少くとも同一構造の筆と考えられる。五代において水墨画は様式として確立はするものの、まだ様式が先走つて筆が遅れていたため、堅い筆を無理して引つぱつている点が目につく。書においても、欧陽修はまだ旧い筆を用いており、蘇東坡は諸葛高の作つた筆を愛用したと云い、旧筆だが相当穂先の長いものを用いたらしい。彼の行書様式の書を見ると、書が頗る主観的になつたことをつくづくと感じさせるが、しかしまだ黄山谷（庭堅）の草書に比するとまだまだ運筆の自由を欠くのは、主として筆の構造によると思われる。黄氏に到つて懸腕直筆の筆法が成立するのも、この筆の発展によると見られるのである。

大秦国の妙薬

―底也伽について―

前嶋信次

旧唐書（巻一九八）拂菻国の条に唐の高宗の乾封二年（西暦六六七）にその国が「使を遣わして底也伽を献ず」とある。（唐会要巻九九にはこれを乾封元年にかけ遣使獣底也伽とあるが、獣は献にあらたむべきであろう）拂菻国のことについては十八世紀以来、多くの東洋学者が関心を抱き、研究の結果も多数発表されているが、特に白鳥庫吉博士の研究は前後四十年にもわたつた綿密広汎なものであり、榎一雄教授がそのあとを受けて新機軸を示している。本

日はこの拂菻国の比定の問題については格別の詮議はしないですましたい。いわゆるローマン・オリエントにせよ、コンスタンチノープルを中心としたビザンツ帝国にせよ、或は西アジアの景教の中心地からにせよ、いずれにせよ、ギリシャ文化と関係の深い所であつたことは明白である。

この底也伽について最も早く、かつ適切な意見を発表したのはフリードリヒ・ヒルトであろう。それより前にフイリプス（George Philips, 1836—96）の如くこれを神像を安直する箱（神龕）または僧伽藍（寺）であろうか、などという説を出すものもあつたが、ヒルトはそれを排して、西方諸国でもてはやされた薬名で、唐本草、明の本草綱目（底野加の條）などにも記載されているとした。更にヒルト自身の所蔵にかかる明の正徳元年（西暦一五〇六）太医院撰「本草品彙精要」には底也加の条に彩色した挿絵をいれてある。それは一人の異国人が、緑色の布をかけた皿に赤や黒の丸薬を盛つたものをささげ、ひざまづいて、石上に座つた貴人にそれを献じている図であり、説明文には諸々のものの胆を練り合わせたものとしてあつた。そこでヒルトはこのものを古代から中世にかけてもてはやされたテリアカ（ギリシャ語 thiriaka）のことにちがいないとした。テリアカはプリニウスその他によると六百種にも達する材料を練りあわせて丸薬に製したもので、とくに解毒剤として特効のあるほか、万病にもきくとして古代ギリシァ人社会で珍重されたが、没薬、蛇の胆、阿片など苦味のものをも含んでおり、のちにはイスムラ教徒の間でも用いられたのである。更に「阿片は最初はこういうものに姿をかえて中国にもたらされたものであろう」といい、またデルブロー D'Herbelot（Bibliothèque Orientale, vol. Ⅲ. p. 453）をひき、トルコ人、アラブ人、ペルシァ人などのイスラム社会ではテリアカの常用者をテリアキーとよび、放蕩者の別名にしているが、これはその中に含まれる阿

片のため身をもちくずすものが多かつたためであり、またアラブ史家によるとバグダード製のテリアカが最良を称せられたといつている。(F. Hirth, China and the Roman Orient, pp. 276—279)

しかし、唐の高宗の乾封二年に拂菻国から底野迦（テリアカ）を献上する以前に、このものは中国人に知られていたにちがいない。そのことは、それよりも更に八年も前の顕慶四年（六五九）に蘇敬等が勅を奉じて撰した「新修本草」（巻十五、獣）に「底野加は味は辛苦、……百病……を主す。西戎に出ず。獣胆を用いてこれを作る。状は久壊丸薬に似て、赤黒色。胡人時にもたらしてここに至る。また甚だ貴し。試に用うるに効あり」とある。また高麗よりわが国に伝来した医方類聚（巻六五）には竜樹菩薩眼論をひき、その麻頂膏の処方をのべ「底野迦陸分、西番者、状如馳胆」を他の二十種の薬物とともにあげているし、また巻四には「五蔵論」をひき「底野迦よく万病を除く」といつている。五蔵論五巻は隋書経籍志に見えるし、ル・コック A. von Le Coq やグリュンウェーデル A. Grünwedel がトウルファン附近で得た古文書中にも耆婆の五蔵論残巻があるという。（万斯年、唐代文献叢考）。竜樹の眼論というものはいつ頃の書か判然しないが、竜樹の著とされた医書類数種は隋書経籍志に挙げられている。また本草綱目（巻五〇、獣部）の底野迦の項には宋の蘇頌の「図経本草」をひき「宋時、南海亦或有之」といつている。

わが国の医書中このものを記載した最も古いものは円融天皇の永観二年（九八四）に丹波康頼が撰した「医心方」（巻一）で「底野迦　唐」とし、和名はないことを示している。果してテリアクが当時わが国まで伝わつたものかどうかは明かでないが、少くもその名称はわが国の医人の間に知られていたことは疑ないと、故富士川游博士は述べている。（医史漫録—中外医事新報、昭和五年四月号）

明末の中国で活動した耶蘇教会の宣教師、イタリアの艾儒略 Julius Aleni はその「職方外紀」（天啓三年―一六二三）中に「如徳亜」の項を設け「古名拂菻又名大秦」と説明し、その西に達馬斯谷（Damasco, Damascus）という国があり、そこの土人は「一薬を製するが甚だ良ろし。名は的里亜加、能く百病を治す。尤も諸毒を解く。これを試みるものありて、まず一毒蛇をもとめて咬傷せしむ。毒発し腫脹するとき、乃ち薬少許をもつてこれを嚥めば、癒えざるものなし、各国甚だこれを珍異す」とある。富士川博士はこれをひき「思うにテリアクは此の頃すでに民間薬として広く行われ、艾儒略もその方を伝えたものであろう」と述べている。（引用同前）

中華民国三十二年（一九四三）に范適（字行準）が発表した「明季西洋伝入之医学」（中華医史学会編医史叢書之一）には唐代の底野伽はこの明代の的里亜加と同じで、「即ち今の鴉片である」としている。陳邦賢の「中国医学史」にも中国が大秦の医薬の影響を受くという一節中で「当時（唐初）底野伽が中国に輸入されること誠に盛であつたが、これは欧洲中世に有名な一種の万病感応剤である。この薬には阿片の調合があつた」と記している。（一九三七年商務印書館初版、一五八頁）

私は一九六〇年九月より六一年一月にかけてシカゴ大学内東洋研究所に滞在中、このものの東洋伝播に興味を抱き、主に同研究所内の Near Eastern Library についてイスラム諸国の資料中から材料を集めたところ、相当の分量に達した。ことにパリのビブリオテク・ナショナールの稿本部に秘蔵される十二世紀末の Kitab al-Tiryāq（テリアカの書）は美しく彩色したテリヤカ絵物語とでもいうべきものであり、アラビア語の説明がついたものである。この書はエジプトのビシュル・ファーレス Bishr Farès が美術史家の立場から研究し、一九五三年にカイロで Art Is-

lamique の第二巻として公刊している。これはテリヤカのイスラム世界普及に関する最も興味深い資料の一つであつた。もう一つレバノンの学者ナジュムツ・ディーン・マフムードの「治療論」というアラビア語の医書があり、その中にテリアカの製法がきわめて詳細に説明してあつた。この書には一九〇三年のベイルートの刊本もある。中世のイスラム社会でテリアカがどのように尊重されたかということは、種々の史料を集めると、かなり明かにすることが出来たが紙数の関係上ここでは省略し、いずれ、もつと詳しい報告を試みたいと思つている。

所伝によればはじめてテリアカを製したのは西暦一世紀の中ごろ、ローマ皇帝ネロの侍医であつたアンドロマクス Andromacus というギリシャ人であつた。その後、ガレーノス（一二九頃―一九九）等が更にこれについて研究しかのアラビア文「テリアカの書」もガレーノスの書に作製したものであることが附記してある。調製の材料は時代と場所とによつて変化があるが、諸動物の胆、各種の香料、薬草など多数を用い、多い場合は数百に達し、決して阿片を主成分とするというような単純なものではない。解毒剤、ついで万病の特効薬としてギリシャ、ローマ世界からイスラム世界に伝わり普及した。その後、西欧世界でもひろく用いられたようであるが、伝入経路はギリシャ・ローマ時代からの直伝と見るよりも、イスラム医学とともに逆移入されたものと見るべきであろう。その根拠について詳論することはここではさけるが、一例をあげるとコルドバで生れ、十二世紀中、医学、哲学で西方イスラム世界（マグリブ）で一代の太宗とたたえられたアヴェロエス（Ibn Rushd, 1126―98）にも「テリアカ論」という専著があり、そのラテン語訳もあらわれて西欧諸国で行われたという。（Encyclopaedia of Islam, 旧版、Ṭibb の項）

西欧のテリアカ製法は徳川時代にオランダの医学とともにわが国に伝えられ、蘭学者の著書中にはこのものについ

て記したものが少くないようである。延宝年間（一六八一頃）の吉永升庵・升雲父子の「阿蘭陀外科正伝」（巻十二）には「安牟登爐摩扁荑天狸谷阿家」（アンドロマクスのテリアカ）のことを伝え、前野良沢（一七二三―一八〇三）に「底野迦真方」（佚）、その門人宇田川玄随（槐園）に「底里亜迦方」などの著がある。小野蘭山（文化七、西暦一八一〇歿）の重訂本草綱目啓蒙（巻四八）には紅毛人将来のテリアギアは、唐代の中国に伝わつた底野迦のことであろうとしている。また文政年間に「中陵漫録」を著わした江戸の医人勝成裕もその中で「底野迦方」と題し、オランダ人の伝えたテリアカの製法をかなり詳しく伝えている。イスラム世界で行われたテリアカはアラビアの奥地などで十九世紀末ころ尚、珍重されていたことはダウティ Charles Doughty (1843―1926) もその「アラビア・デセルタ」などで伝えた所であり、西欧でも少くも十九世紀末ころまでは行われた。わが国の製薬会社中には現在でもその処方を伝えているところがある由である。ギリシャ・ローマ世界よりイスラム世界へ、イスラム世界より西欧へ、西欧を通して極東へという経路によつて伝来したもろもろの文物は、中世において、イスラム世界から直接に西域または南海を通つて極東に伝わつていた同種類、同起源の諸文物と再会することが決して珍らしくはなかつた。テリアカの場合もその一例として、東西文化交流史上の一データにとりあげてよいものと私は考えている。

朝鮮の貢納制

田川孝三

一

李朝前半期における王室、政府の財政は田税米穀の外、進上、貢物としての現物徴納制により賄われた。進上は高

麗以来行われたもののようであるが、十五世紀初頭に特に整理され、制度として確立された。即ち物膳・薦新・方物・薬材・鷹子進上の制である。物膳は毎月朔望の二期の外、大小日次進上の如ものあり、薦新は祭祀奠物で、夫々上級の額や物目も制定された。

貢物は土産を以てする土貢（元定貢物）を中心とし、田税としての布貨油密、魚船税・巫覡神税布等の税物、公奴婢身貢を始め、夫々地方官に、上納すべく分定賦課されたものを総称していつたものである。税物・身貢以外は、官設機関、定属役戸、或は上番軍人の使役による生産物が進貢されたが、次第に民戸に徭役として課され、一時は官備貢物、民備貢物等の語があつたが、後にはすべて民戸の負担となつた。

二

貢物は地方官から直接政府へ、進上は道観察使、兵馬・水軍節度使から王室各司に納入した。十七世紀初頭、この制度は改革されて大同法として地税化された。即ち田税の他に、大同米市を宣恵庁に徴収し、これを以て王室・政府経用物資を貢物主人より購入する制が確立され、大同法の施行は凡そ一世紀を要して両界を除く六道に施行された。然しこの大同法の成立は、貢物主人の成立と表裏をなすもので、又その由来を探求すれば貢納請負即ち代納の盛行に帰着する。

貢納の請負は高麗以来放任されて李朝に入るのであるが、李朝初期貴族官人の行為は厳に禁断された。然し既に安易な営利行為として社会的慣行となつており、世祖朝の如き全面的に解放されて政府機関さえもその請負権を掌握し、宗室勢家を始め、官人・僧侶・商人はその営利に狂奔し、人民は二重三重の収奪に苦んだ。これを請負当事者の面か

ら見ると、王権及び政治社会の変動によつて特権貴族、僧侶、商人等とその主体者に特色ある変動が見られる。十五世紀の半ば以降この活動は全面的に禁制がくだされるが、それはむしろその主体者の切換を劃したものであつた。

三

宗室、士族官人、商人、僧侶の如き夫々時の権力と結んで活動するものの中に、その間隙をぬつて営利活動を続けたものに政府機関に所属する胥吏、奴僕がある。彼等は直接貢物徴納の事務を担当したから、その官権をかつて地方貢吏を侵害したが、又商人、主司官人と結托して請負を行い、物資財貨を蓄積してその力を強化した。胥吏・奴僕は各司に属してその下部機構をなすもので、地方より上番立役するものも多いが、その主要の任務につくものは、京城居住の坊民・市廛市民、或は王室勢家と何等かの関係を有する奴であつた。その主要任務とは各司の経費物資出納の記居録事務、物資管理、倉庫守直である。彼等は多くその所属主司に世襲的に立役し、その主司を生活の本拠とした。上層の官吏が任免により屢々交替したのに反して、彼等はここに固着し法典故実・慣習事例に習熟し、しかも官吏は尊大の風多く実務に従事せず、勢い彼等は官衙の実務を担当してその実権を掌握したと云つて過言でない。こうした吏奴の請負営利活動を通観するに、略次の三期に分つことが出来る。

一三九二　太祖元……請負貢納放任……
一四〇八　太宗八……身分的に制限す……
一四二二　世宗四……地域物資の制限……
一四四八　世宗三一…特権的僧徒の請負独占

各司私主人吏奴活動の第一期
主人の権力の間隙を縫つて散発時にあらわれてくる程度

一四五九　世祖五……全面公認……　貢吏の営利活動の活潑化と商人江民私主人業者等との結合

一四六八　睿宗即位（世祖一四）全面禁止

一五〇二　燕山八　各司私主人吏奴活動第二期

一五一二　中宗七　貢吏と江民私主人業者との花主関係既に成る

一五五〇　各司私主人吏奴活動第三期

一五六七　宣祖元　貢納請負の主導権掌握

一六〇八　光海君即位年　大同法　貢物主人の名称あらわる

四

貢納請負の全面的解放の時期から、官吏の営利活動が表面に出てくるが、その際結托の相手として登場するものに主人、私主人、又は江民主人等といわれるものがある。貢税物資の王京収集の入口を扼するのは、漢江、竜山、西江の三江があり又豆毛浦もそうであつた。所謂私主人とはこの物資集散の関門である江辺に居住する商人で、従つて江民主人等の語もここに由来するものであろう。彼等が貢吏と結托の様相より見ると、この商人私主人は、宿屋、倉庫業、金融、運輸業を多角的に経営し、十五世紀後半には貢吏と特殊な花主関係を持つに至つている。これは後世に現われる客商主人、即ち客主の先蹤であろうと信ぜられる。貢吏は本来、上京に際し、その地方官の京邸舎に止宿し、

その邸吏即ち京主人の周旋をうけて物資を納入したが、江民主人等と関係をもつに至つて、専ら彼等のもとに出入し物資の横流し等を行つた。両者の花主関係もこうして出来たものであるが、一方江民私主人は貢吏の地方別に得意先を握り、取扱い物資も専門化し、世襲して門戸を張つたもので、京師のみでなく地方にも同様の営業者がいたことが考へられる。

一方この民間の私主人に対して、各司私主人（各司主人）なるものがあつた。由来各司倉庫の出納は司憲府監察の立合を要し、又直に重記に録して戸曹に報告せねばならない。この繁頻な手続を省き応急の間に合はせる為に、別に私庫が発展し、その管理者吏奴は各司私主人と呼ばれた。その吏・奴は上述の如き各司の下部機構であり、吏・奴中の京城居住者中の勢力を有するものがこれに任じた。私庫は公庫に比して比較的その出納は自由であつたが、同時に供饋公辯の機能をも果したものであつた。

供饋公辯は制度として制せられたものではないが、慣行的に衙門出仕の官人に酒食を公給した。このことは中国においても行われていないのと、多く経費を要し、又官人の吏奴侵害の因ともなつた為に十六世紀初頭屢々革廃のことが議され、その末期宣祖朝の初、一時廃止されたこともあつた。この供饋物資の支弁の外、又官人の迎送宴遊の費もすべて私庫が供した。私主人は為に官人の侵害もうけたが、逆に供饋等支弁の権を握つて官人を籠賂した。各司吏奴の請負活動の主体はこれら私庫主人を中心とするもので、当初は官人の侵害圧迫に対する自己擁護の営利から出発したものと思われる。

その活動は第二期に入ると、請負による営利収奪手段は一段と悪化するが、それは同時にその資力の蓄積の為でも

あつた。一方その営利は貢吏・江民商人等との結托に脅かされたが、自ら積極的に転じ、貢吏貢物の確保を期し、その手段を営業化した。進んで江民私主人の営業を取入れ、貢吏に宿舎を供し、貢物を保管し、その請負納入権を独占した。各司私主人等請負業者は列邑を分ち、已れのものとして文券を作り世伝したという。これは先の商人主人同様貢吏の地方別による花主関係が成立し、その歴史的な貢納関係による取扱物資の専門化が出来ると同時に、自らは組合を作り、世襲的にこれも維持したことが推測される。即ち彼等は政治的には政府下部機構をなし、一方社会的・経済的に商人組合として資力を貯え、物資毎に地方を分占して貢納権を独占した。即ち商人業者との抗争の中に、官権によつて自らを特権専業商人へと成長せしめて第三期を迎へるのである。貢物主人なる名称は、明宗、宣祖初期に既に表われるが、このこと自体、各司私主人等吏奴の一団の貢納請負業者としての専業化が既に完成していたことを示すものである。大同法成立の基礎はこのような官庁下部機構の経済的社会的脱皮にあつたものである。一面、十六世紀末に所謂「胥吏政治」が国家の危殆を招くものとして叫ばれているが、問題の核心は、政府財政物資の納入が吏奴の掌中に壟断され、人民は二重収奪の機構より脱し得なかつたことにあると云える。

古代バビロニアの紀年について

板倉勝正

バビロニアの紀年について、一般に認められている編年法、年表はない。大体バビロンの紀年はハンムラビ以後はよくわかる。それはアマルナ文書の中に、各国々との間に交換した外交文書があり、また王名表などもよく残つている。前一、〇〇〇年前後になるとアッシリアの史料（リンムウ表）もあり、極めて確実となる。ところで、中心をな

す比定方法は王名表をしらべて在位年代の累計を推定する方法である。しかもそれを確かめる手懸りとなる事実がところどころにある。その一つは、ヒッタイト侵攻の年代、いま一つは、天体（金星）運行に関する記録の天文学的検討である。但しその各々について基準が一つでなく、High chronology, Low chronology, 及びその中間を取る Middle chronology の三法がある。戦前は大体絶対年代を高く取つたものであるが、戦後の研究は逆に絶対年代を引下げて考える傾向がある。先ずアルノ・ペーベル（米）がコルサバッド出土のアッシリア王名表を解説したが、それによると従来ハンムラビより遙かに古いとされていたシャムシ・アダドが、ハンムラビに近い年代の王であることがわかつた。又更に、エウフラテス河域のアッシリア遺跡の発掘から、シャムシ・アダドとハンムラビが同時代人であることが確定され、欠文のある記録のため詳細は不明乍ら、年代引下げが妥当とされるに至つた。（第Ⅰ表略年表）

所で、上限とされるウル第一王朝はといえば、王名表に現われぬ小王国・ラガシュの発掘が進むにつれ、ラガシュのウルカギナが、ウルクの Lugalzaggesi と同時代なこと、又従来は、中国で云えば秦の始皇帝にも比すべきサルゴンを以て紀年を考えて（サルゴン以前とサルゴン以後とに別つ。）いたのが、ラガシュ Lagaš の Entemena とウルク第二王朝の Lugal-kinise-dudu とが条約を結んでいて、同時代人として交渉のあつたことが確定し、またラガシュの Ur-Nanše の碑文文字の字体や書き方がウル第一王朝の初期に比定されるに到つた。ではウル第一王朝の絶対年代はと云えば A'annipada の神殿建設碑文が発見され、彼が Mesannipada の孫であるということから逆推して紀年がきめられてきた。また、ラガシュの Lugalšagengur の神殿建設碑文等との関係から、キシュの Mesilim ——ラガシュの Lugalšagengur 年代が推定されてきた。（第Ⅱ表参照）

第 I 表　略　年　表

3100	神殿経済
	文字の使用
2560	ウル第一王朝
(2550～2430)	(ラガジュ古王国)
2414～2233	アッカド王朝
2128～2019	ウル第三王朝
1894～1595	バビロン第一王朝
(1792～1750)	(ハンムラビ)
(1814～1781)	(シャムシ・アダド一世)

〔W. von Soden: Ploetz. 1960 (S. 77—81)〕

3000～2800	ウルク期
2500～2700	ジェムデト・ナスル期
2600～2350	初期王朝期
(2500)	(ウル第一王朝)
2350～2150	アッカド王朝
2150～2070	グチウム時代
2065～1955	ウル第三王朝
1955～1700	イシン＝ラルサ時代
1830～1530	バビロン第一王朝
(1728～1686)	(ハンムラビ)
1530～1160	カッシイト王朝

〔H. Schmökel: Kulturgeschichte des Alten Orients. 1961 (S. 754—755)〕

第 Ⅱ 表　王　朝　表

	(Kiš)	(Uruk)	(Ur)	(Lagaš)
	(Ⅰ)	(Ⅰ)	(Ⅰ)	
2700	Enmebaragesi			
	Agga.....	Gilgameš		
		Ur-lugal (1)		
2650		Utulkalamma		
		Laba[š]um		
		Ennundaranna		
	(Ⅱ ?)	Mes(?)-HÉ		
		Melamanna	(Meskalamdug)	Enkhegal
	Mesilim	Lugal-ki-tun(?)	(Akalamdug)	Lugalšagengur
2550			Mesannipada	Ur-Nanše
		(Ⅱ)	Meskiagnunna	
		En-PIRIG(?)-duanna	A'annipada	
2500		Ur-lugal (2)	Meskiag-Nanna	Eannatum
		Argandea	Elulu	Enannatum (1)
		Enšakšuanna	Balulu	
2450		Lugalkinišedudu ———		Entemena
		Lugalkisalsi		Enannatum (2)
	(Ⅲ)	(Ⅲ)		Enetarzi
	Kubaba			Lugalanda
	Puzur-Sin	Lugalzaggesi ———		Urukagina
	Ur-zababa			
	Šarrukin			

それ以前についてはシュメル王名表による外ない。この表を訳して校訂したものが Jacobsen; The Sumerian King List, 1939. である。しかし洪水前の諸王の在位年代が三六、〇〇〇年～二一、〇〇〇年におよぶものがあつて信じられない。又諸王朝がすべて一系統に縦に継げられているが実際は諸王朝がかなり並行的に存在したことがわかつているなど注意すべき性質のものである。今これを整理してみると、特に注目されることは、一時期に数王朝が並列的に支配していたのを一系にまとめるなどの問題はあるにしても、かなり確実な伝承に基いて作られていることがわかつてきた。

従来知られている最古の歴史的人物は、キシュ第三王朝のメシリムで、ウル第一王朝のア・アンニ・パダ等と比較して、彼等の歿後五〇〇年以内のかなり正確な伝承にもとづいており、大体前二五〇〇年頃とされた。中国における殷墟の発掘により、史記の記録の古い部分がかなり正確であることがわかつたように、これらの王名表もまたかなり正確でありうる。少くともそうした伝承の核をもつものであることがわかつてきた。

第二次大戦後の研究の進展の上での重要な新史料は、シュメールの主神エン・リルの聖都とされるニップールの、トゥンマル Tummal 礼拝堂建設碑文（トゥンマル碑文）である。そこに見える短い王の固有名詞を記した碑文が特に重要で、これはシュメール王名表と同時代と見えるが、記載王名の順序が大変違う。しかもメソポタミヤの神殿建設碑文の通例の形からして、一般にその記載事実は正確な歴史事実とみなしうるもので、多少の文学的虚構を含むとは云え作為性は少い。そして注目すべきは、ギルガメシュと闘つた英雄として有名なアッガ、及びギルガメシュという叙事詩神話中の人物の名が、この歴史的史料の中に現われているのである。彼等は果して歴史的人物なのか、単な

る伝説上の人物なのか。

この碑文には更に、従来シュメール王名表でのみ名を知られ伝説上の人物とされていた、キシュの王 Enmebaragesi の名を記している。ところが第二次大戦後、ディヤラ渓谷のカファヂェ神殿遺蹟発見の壺、皿の破片に、このキシュ王 Enmebaragesi の名が現れた。この年代は Edzard によつて比定され、こうして次々と叙事詩中の人物が実在性を強めるに到つたのである。

後世のシュメールのシュルギの作「ギルガメシュ讃歌」によると、ギルガシュに破られたのは、アッガではなく、エンメバラゲシとされている。勿論これは文学作品ではあるが、ともかくある時期に、キシュの王がギルガメシュと戦つたことがあつたということが事実と思われてくる。ギルガメシュはウルクにおいては五代目の王とされる。ウルク第一王朝の王名表および統治年数を見ると左の如くである。即ち第六代以後が史実的人物であるのに対し、それ以前は神話的である。第二代エンメルカルはクレーマーの紹介したテキストにも見え、第三代ルガルバンダは英雄神、第四代ドゥムジも同様だが、但しエヂプトでは実際治世九〇余年という王がいるので全く史実性がないとはいえぬ。そしてギルガメシュは叙事詩的英雄となつている。所がトゥンマル碑文によれば、王名表でギルガメシュのはるか以前に位

第Ⅲ表　Tummal 建設碑文

(1) Agga [Kiš の王]
　Enmebaragesi の子
(2) Meskiagnunna [Ur の王]
　Mesannipada の子
　[従つて A'annipada の兄弟]
(3) Urlugal [Uruk の王]
　Gilgamesh の子
(4) Meskiag Nanna [Ur の王]
　Ananne の子
　[A'annipada と同一とする説もある。
　Nanne とも書かる。]

1.	Meskiaggašir	230年
2.	Enmerkar	420年
3.	Lugalbanda	1200年
4.	Dumuzi	100年
5.	Gīlgameš	126年
6.	Ur-lugal	30年
7.	Utulkalamma	15年
8.	Labashir	9年
9.	Ennunnadanna	8年
10.	Sukhushkhede	36年
11.	Melamanna	6年
12.	Lugalkiaga	36年

置づけれていたものがギルガメシュに近い時代に位置づけられることがわかつてきた。ギルガメシュの歴史性について最初に注目したのはクレーマーである。彼は「ギルガメシュとアッガ」を取上げ、これに基いて推定を立てたが、その後ヤコブセン等の研究でいよいよ実在性を強めた。またギルガメシュがウルクの城壁を作つたということが碑文にも出てくるが、考古学的にも初期ウルクの Plano-covex 型という特殊な練瓦がそれらの建築に用いられていて、前二、六〇〇—二、五〇〇頃にギルガメシュの年代を否定することが合理的であるといいうるのである。以上、いずれも確定的とは云えないが、叙事詩的英雄を実在人物とする証拠が戦後次第に増加してきたのである。そして他方、叙事詩的人物であることが歴史的人物であることを否定する根拠とはならない。例えば魚神エアの話から魚神崇拝のあつたことが推定され、エリドゥ神殿趾からの魚骨の発掘によつてそれがたしかめられた場合もあり、かくて従来仮空のものとされてきた王名表が、文字の解読の進展と共に、発掘結果と対比して同時代性を比定してゆくことによつて、今後ますます意外に古い時代についても信憑性をもつことが証明されるという、史料の再評価再解釈の段階に入つたといえるのではなかろうか。（なお詳細は、中央大学文学部紀要、史学科第八号掲載の論文参照）

（文献）M. B. Rowton : Chronology (C. A. H. I.) 1962

C. J. Gadd : Cities of Babylonia (C. A. H. I) 1962.
D. O. Edgard : Emmebaragesi van kis (Zeitschrift für Assyriologie 1959.)
Th. Jacobsen : Early Political Development in Mesopotamia (Z. A. 1957.)
S. N. Kramer : History begins at Sumer. 1956.
Th. Jacobsen : The Sumerian King List. 1939.
G. A. Barton : Royal Inscriptions of Sumer and Akkad. 1929.
Thureau-Dangin : Die Sumerischen und Akkadischen Königsinschriften. 1907.
P. Van der Meer : The Chronology of Ancient Western Asis and Egypt. 1955.

イスラエルの宗教と文化

関根正雄

イスラエルにおける宗教と文化の問題をわたくしはかねがね「砂漠」と「沃地」の対立から考えて参りました。これは和辻先生の「風土」に一応よつたのであります。ところが今度一ケ月程実際にイスラエルに滞在して色々見聞いたしました結果、「砂漠」というものに対する考えがかなり変つて参りました。その点を申し上げてみたい、と思います。従来多くの書物を通じ、又学生時代に自分でも紅海のあたりを船で通りまして感じて居りました砂漠の特色は渺々たる乾き切つた砂原あるいは岩山といつたものでありまして、それこそ「沃地」の美しさに対して、たえがたい程索漠とした地帯と思つて居りました。ところが今度イスラエルの各地を旅行し、感じましたのは、何よりも砂漠特有の美しさであります。それはことに山や海岸線が光のヴェールをかぶつている、とでもいうべき美しさに輝いて見えたことであります。エルサレムで見られるモアブの山なみ、カルメル山から望んだアッコにいたる海岸線、ガリラヤ湖の対岸の山々の独特な山はだ、さらに南の方の死海やエラトにいたるネゲブやその他のはげしい砂漠地帯の山や

丘の起伏には共通の美しさがあります。それは一面光かがよう明るさの中にありながら、ギリシアにおけるように物の形がそのまま、はつきりと見えるのでなく、又日本の春の景色のように霞んでいるのでもない、いわば光のヴェールをかぶつている、とでもいうべき山や丘や海岸線の姿なのであります。それは一つには山のひだが多く、それが烈しい日の光で独特の陰翳を生じている。ということもありますが、より根本的なことは南や東の砂漠地方からの細かい塵が空中に浮んでいて、それが光を反射するためではないか、と考えた次第です。エルサレムあたりでも夏や冬にうつる時期のいわゆるハムシーンという風の吹くときは勿論、そうでないときでもいつの間にか窓ぎわに細かい砂塵がたまることもそれを示している、と思います。もつとはげしく表現すると、これは最南端のアカバ湾頭のエラトへいつたときに思つたことですが、直接に感ずるものは空中の光と熱であつて、その光と熱の空間の後ろに山や海の形なり、色なりが浮んで見えるとでも言うべき状況なのであります。ヘブライ語で色彩の用語が簡単で、明るさや暗さで表現する場合の多いことなどが考え合わされた次第であります。このようなあくまで現実でありながら同時に夢を帯びた風土からイスラエルの宗教が生れてきたことが、よく理解されるように思わざるを得なかつたのであります。

次にイスラエルの問題としての砂漠と沃地という場合には砂漠とは出エジプトをしたイスラエルがそこで決定的な経験をしたと思われるシナイ半島あるいはアラビア半島、つまり南方の砂漠地帯を、沃地といえば、全体として砂漠的な風土の中にありながら比較的に沃地的なカナンの地を考えているわけであります。後者は小アジア、シリアと通じ、カナンにおける沃地的なものは小アジアからシリアを通つて伝来したものが多いと思われます。例えばネビイム的な預言運動の如き。ところがこの問題についてこの頃では少しずつ見方が変つて参りまして、広く東部地中海世界

の文化圏を考え、それがイスラエルを含めて考えられるようになつてきているのであります。それは具体的には一九二九年以後シリアのラッシャムラでのいわゆるウガリット文書の発見で、イスラエルとギリシアの連絡がついたことが関係して居ります。何れにせよ、ギリシアとイスラエルが歴史的な意味でもつながる、というのが第二次大戦後に多くの人によつて主張されてきた一つの点でありましてその一番強力な主張者がウガリット語研究の第一人者でもあるサイラス・ゴルドンというアメリカにいるユダヤ系の学者であります。わたくしはかねてゴルドンの主張に興味を持ち、ここ数年自分なりにこの問題を考えて参りました。今度ドイツで開かれた国際旧約学会でもゴルドンの発表がわたくしの大きな関心と興味の的であり、又ゴルドン説に対して多くの他の人達の批判などをきいて参つたのであります。この問題がイスラエルの宗教と文化の問題について新たな観点である、と思われます。

王国以前のイスラエルとホメーロス時代のギリシアが何かの意味でつながることは、ゴルドンその他の人々の試みたように、前述のウガリットをその間において考えますときに一応明らかである、と思います。例えばウガリットの神々の世界は一面驚く程に全体として又個々の点でホメーロスのそれに似て居り、他面その最高神エール、その子バールはそのままイスラエルで一番中心的に問題になる神であります。ウガリットが両者の中間に立つことは何人も疑い得ないわけであります。もつとも最近のゴルドンはクレタ島出土の線文字Aの解読に成功したとし、この線文字Aの言語が、フェニキア語系統のセム語である、と申します。今回のドイツにおける発表もこの解読のことが中心でありました。それでウガリットよりももっと直接に「ミノアの橋」ということを言い、これがイスラエルとギリシアを結ぶものと見て居ります。イスラエルの古い時代に出てくる牛の礼拝などをもクレータの牛の礼拝から説明しようと

していています。何れにせよ、東部地中海の文化圏を何らかの意味で認むべきことは、古典学者の中にも、旧約学者の中にも次第に数をましつつある賛成者とともに、わたくし自身も考えて居るのであります。わたくしはホメーロスのギリシア語の中に、文法形態としてもセム語的と思われるものがある、と思いますし、又聖書とホメーロスの間に余りに多くの共通の表現がありますので、それがどうも偶然とは思われない、という気がしているのであります。

ただ問題はイスラエルに対するこのような東部地中海的影響がどの程度のものか、ということでありまして、ウガリットやクタレを通し間接にギリシア世界と通ずることは確かといたしましても、ゴルドンのいう程この結びつきが密なるものであるかどうかであります。例えばゴルドンはウガリットのケレト伝説の中に失つた妻を戦争によつて取り戻してくる、というモチーフを見出し、これをホメーロスのイーリヤスと結びつけ、ケレト伝説中に原イーリヤスを見出しうる、と考えています。のみならず同様のモチーフがイスラエルの族長伝説をも貫いて居り、例えばアブラハムがゲラルやエジプトで一度その妻を失い、それを取戻してくるというモチーフがそこに見られる、と申します。一人の女性に対するロマンチック・ラヴのモチーフがギルガメシ叙事詩やエジプトの古い物語に認められず、これは地中海世界に始つた、という意味ではホメーロス、ウガリット、旧約（ダビデ時代まで）に何か共通のものがある、と考えたいのでありますが、イーリアス、ケレト、族長をゴルドンの言う意味で連関するものと考えてよいか、は大いに疑問であるように思われます。しかし何れにせよイスラエルの文化という問題を考えるときに、東部地中海の文化圏を問題にしてゆくことが必要であることは疑いをいれない所であります。

附記　榧本杜人氏の講演は、東洋学報第四六巻四号彙報に掲載いたしました。杉勇氏は海外御旅行中につき要旨を省略させ

ていただきます。

3　研究会

東洋文庫談話会

昭和三十七年四月十七日　"Recent development in Orintal Studies in Great Britain"　ロンドン大学東洋アフリカ研究所ライブラリアン　J・D・ロピアソン

昭和三十七年五月十二日「中国の国家権力と農民支配」　鶴見尚弘

昭和三十七年六月二日「明王朝の権力構造—国家論の問題として」　酒井良樹

昭和三十七年七月九日「西ヨーロッパに在る蒙古写本について」　ケルン大学教授　ワルター・ハイシッヒ

昭和三十七年七月二十一日「満文老檔に見える毛文龍の書簡」　神田信夫

昭和三十七年九月十五日「メキシコから帰つて」　榎一雄

昭和三十七年十月二十七日「欧米学界の一端を視察して—ウィーン学派民俗学の現情を中心に」　白鳥芳郎

昭和三十七年十一月九日「欧米みやげ話—ハーバードの東洋学と欧州のウィグール研究」　山田信夫

昭和三十七年十二月一日「台湾見聞談—台湾所在の清朝満洲語資料とその整理状況」　神田信夫

昭和三十七年十二月十五日「チベット支配下敦煌における漢人の叛乱」　菊池英夫

昭和三十八年二月二十六日「楢原陳政と福州事件」　田中正俊

昭和三十八年三月五日「リー・E・ウィリアムス氏（ブラウン大学教授）を囲んで華僑史研究についての情報交換」

4　展　示　会

第四十九回展示会　昭和三十七年十月十三・十四日　於東洋文庫

今回の展示会は、日本及び朝鮮を中心としつつ、広くアジア地域文化のあとづけに資することを目的とした。出陳の書は、凡そ左の通りである。

第一部	和　書	一三点
第二部	朝鮮書	一七点
第三部	洋　書	一一点
第四部	漢籍その他	一五点

特別展示会

東洋文庫所蔵チベット関係文献展示会　昭和三十七年八月二十一日　於東洋文庫

ユネスコ東アジア文化研究センター主催チベット語講習会に際し、受講者及び関係者のために約三〇点を展示した。

東洋文庫所蔵貴重書、図録展示会　昭和三十八年三月十二日　於東洋文庫

三菱系諸社の親睦団体二火会の文庫見学に際し約三十点を陳列した。

5　図書の収蔵及び閲覧

財団法人東洋文庫は、一九一〇年までの中国に関する欧文文献のほぼ完璧なコレクションであるモリソン文庫（約二万四千冊）を中心とする洋書およそ三十万冊、さらに三千部に及ぶ中国の地方志や同じく八百種に達する族譜などを含む漢籍・朝鮮本・満州本・蒙古本・安南本・西蔵本・梵本・暹羅本など約五十万冊、また我が国の広橋家文書などの古文書・古版本・古写本・江戸時代の文学書、名家の自筆本・旧蔵本を系統的に収めた岩崎文庫（八千四百十二部、およそ三万八千冊）を主とする和書、その他、稀覯書写真、ロートグラフ、並びにマイクロフィルム約百十万齣を所蔵している。

図書に関する業務は、現在、資料室、洋書目録室、和漢書目録室、および閲覧の各室に別れて行つているが、目録整理と閲覧業務とは国立国会図書館支部の管掌となつている。本年度における各室の事業の概況は左の通りである。

A　資　料　室

1　資　料　調　査

(イ)　新入庫図書リスト

新着図書目録　和漢書　八及九分冊

東洋文庫新入庫図書の中、洋書のみは、三十七年九月以降、国立国会図書館「洋書速報」に収録されることになつた（但し毎月十五日発行の速報にのみ）。本年度東洋文庫に入庫した洋書のリストは、右速報第一四二号（三

十七年九月十五日発行）より、第一五五号（三十八年四月十五日発行）までの分に登載されている。

(ロ) 藤井文庫本の登録終る。

藤井尚久博士の収集にかかる本文庫は和漢洋の本草書が中心をなしている。藤井博士はすでに昭和十七年『医学文化年表』をものされ、先年来、日本学士院の編纂になる『明治前日本医学史』において、「明治前本邦疾病史」「明治前本邦内科史」「明治前創傷療治史」「本邦（明治前）著名医略伝」「本邦医事文化年表」「わが国に於ける西洋医学の輸入とその発展経過に関する主要年譜」の諸篇を担当執事され、その間に収集参考にされた貴重な資料である。昭和三十一年に受け入れて以来諸種の事情で整理が遅延していたが、一、三〇〇余点の登録が一応終つた。

(ハ) 国内・国外出版物についての基礎的資料の調査

2 資料購入

（数字は冊数を示す）

区分	和書	漢・朝鮮書	洋書	計
逐次刊行物(冊)	三一二	五	一二九	四四六
新聞(部)	一			一
単行本(冊)	八六	一五五	八〇四	一〇四五
計 冊	新聞 三九八 一部	一六〇	九三三	新聞 一四九一 一部

3 資料交換

（数字は冊数を示す）

	受贈				寄贈				
	和漢書		洋書	計	国内	国外			計
	和書	漢書				欧米	アジア		
逐次刊行物(冊)	一四一一	五一一	八九三	二八一五	三八四五	一〇三一	一〇二一		五八九七
新聞(部)	四	六		一〇					
単行本(冊)	六四〇	四九六	五六六	一七〇二	五六八	五二八	二四二		一三三八
新聞(部)計(冊)	二〇五一四	一〇〇七六	一四五九	四五一七一〇	四四一三	一五五九	一二六三		七二三五

4 資料整理

区分	和書	漢・朝鮮書	洋書	計
逐次刊行物(冊)	七三	八八	一四二	三〇三
単行本(冊)	四	二	一二	一八
計	七七	九〇	一五四	三二一

B　国会図書館支部東洋文庫事業概要

一　図書の受入、整理

(1)　洋書目録室

上半期（四～九月）

増加図書の受入れ、分類記入、基本カード、複製カードの作成約一、〇〇〇部（この中には Periodicals のものも相当にあつた。殊に最近の傾向としてアメリカ発行の叢書の寄贈や交換が活潑になつた。例えば、Illinois 大学出版の Illinois studies in the soial sciences の様な大部の寄贈があり、又 El Colegio de Mexico 出版の大部の研究書（スペイン語）が交換によつて入庫した。）

従来、東洋文庫は東洋に関する各国語で書かれた文献を収蔵して、その範囲は東は太平洋、西は地中海沿岸に及んだが、アメリカ大陸は除外していた。然し今やアメリカの研究も無関心ではいられなくなつたので下記の様な分類表を作つてこれらの書籍を収蔵することとした。

XIX America

1. North America.

A. Canada.

B. Alaska.

C. United States.

a General works and Geography.

b Anthropology and Ethnography.

c Natural history.

d Art and Archaeology.

e Philosophy and Religion.

f Philology and Literature.

g History and Biography.

h Social sciences (Sociology, Statistics, Politics, Administration, Finance, Law, Education, Medicin & Hygiene, Economy & Industory, Communication, Customs & Manners).

i Military.

j Miscellaneous.

D. Mexico.

a General works and Geography.

b Anthropology and Ethnography.

c Natural history.

d Art and Archaeology.

e Philosophy and Religion.

f Philology and Literature.

g History and Biography.

h Social sciences.

i Military.

j Miscellaneous.

2. Central America (Guatemala, Honduras, Nicaragua, Costarica, Panama).

3. West Indies.

4. South America (Brazil, Argentine, Patagonia, Chile, Bolivia, Peru, Colombia, Venezuela, Guiana, Paraguay, Urguay).

(2) 和漢書目録室

(イ) カード作製

a 新排架カード

和漢書分類、書名カード六、六三五枚

逐次刊行物 一四〇部

b　既排架カード調査、整理、補充

欠カード補充　四、〇〇〇枚

日本史研究室用カード補充　四五〇枚

事務用カード補充　七〇〇枚

(ロ)　作製カードの分類、排架

(ハ)　和漢書に関するリファレンス　一六七件

(ニ)　和装本及び帙の題箋書き　七五〇枚

(ホ)　未整理破本の整理　四〇〇部

(ヘ)　製本、製帙の事務　①製本　三三二冊　②製本　四九六個

(ト)　破損本及び破損帙の修理　一五〇部

(チ)　複写事務　①複写本に関するリファレンス　二五〇件　②複写フィルムの保管及び保管カードの作製　四五〇枚

(リ)　地方志追加目録作製中

(ヌ)　展示会出品和漢書の解説作製　二二種

二　図書の閲覧及び考査

(1)　昭和三十七年度図書閲覧状況

月	開館日数	閲覧人員	一日平均	昨年同月との比	閲覧図書数	一日平均	昨年同月との比
四	二五	一七五	七		一、九一一	七六強	一三五減
五	二四	一八九	八弱	一二二減	二、二五七	九四弱	一、二六八〃
六	二六	二三二	九〃	一〇三〃	二、三七四	九一強	二、九〇一〃
七	二六	三二〇	一二強	一八一〃	四、一二五	一五九弱	四、三七〇〃
八	二七	四〇六	一五〃	二一二〃	七、〇二六	二六〇強	四、四五八〃
九	二五	三三九	一四弱	一四三〃	七、三五四	一九四〃	一、〇四増
十	二五	二九〇	一二〃	一四一〃	五、二九三	二一二〃	一、六九四減
十一	二三	二四三	一五〃	五〃	四、八九八	二一三	八九〃
十二	二二	四〇六	一八〃	四八増	五、九三三	二七〇弱	三六一〃
一	二二	一九八	九	三六〃	三、三九七	一五四強	五四〇増
二	二四	二九四	一二強	八九〃	四、七三八	一九七〃	六〇一〃
三	二二	二二九	一〇〃	六〇〃	三、三八八	一五四	六五〇〃
計	二九一	三、三二一	一二弱	六六六減	五二、六九四	一八一弱	六、二七八減

(2) 閲覧図書数内訳

月	和書		漢書		洋書		合計	
	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数
四	七五	一七〇	一六九	一、三八六	一九七	三五五	四四一	一、九一一
五	一四一	二四三	一五五	一、七五二	一五六	二六二	四五二	二、二五七
六	一四五	三二三	一七二	一、六〇一	二七〇	四五〇	五八七	二、三七四
七	一五九	三五一	三三七	三、四三六	二四五	三三八	七四一	四、一二五
八	二〇二	四六七	六一八	六、二一一	一九一	三四八	一、〇一一	七、〇二六
九	九八	三〇〇	六二五	六、八六九	一三二	一八五	八五五	七、三五四

十	一〇三	三三二	四四八	四、六九八	一六一	二六三	七一二	五、二九三
十一	一七四	五一二	四三七	四、〇一一	二二八	三七五	八三九	四、八九八
十二	三〇六	七六二	四七七	四、八五一	二一六	三二〇	九九九	五、九三三
一	一一六	二一三	三〇六	二、九〇八	一八一	二七六	六〇三	三、三九七
二	一四二	三九八	四〇九	三、六九六	二七五	六四四	八二六	四、七三八
三	九三	三七四	三一一	二、七〇七	一六九	三〇七	五七三	三、三八八
計	一、七五四	四、四四五	四、四六四	四四、一二六	二、四二一	四、一二三	八、六三九	五二、六九四

考査件数　一六七件

閲覧票発行者数　二三七名（一五八〇―一八一六）

（内訳）　専門研究者　四二名

一八％
- 大学教員　二九名
- 研究所員　六〃
- 高校教員　七〃

学生　一八〇名

七六％
- 大学院　三六名
- 学部　一四四〃
  - 男　一一二名
  - 女　六八名

その他　一五名　六％

6　資料複写

資料複写事業には、東洋文庫がみずからの所蔵資料を一層充実せしむるための、図書収集事業の一環をなすものと、広く内外研究者・研究機関の閲覧・利用の便に供するために行う資料複製サーヴィスとがある。前者については研究活動との連関においてのべる。後者については、本年度実績は左記の如くである。

資料複製サーヴィス

マイクロ写真複写

申込件数	駒数	焼付引伸	ポジフィルム
四二一件	四四、三一四コマ	一三五、六二五枚	四、九四八呎

7 情報連絡

今年度における東洋学インフォメーション・センターの事業内容は次の通りである。

一、一般情報事務

1 通信処理

東洋文庫の海外連絡事務、例えば海外プロジェクトとの連絡、問合わせに対する回答、出版物、マイクロ・フィルムの注文、交換及びその支払に関する事務を取扱つている。

2　便　宜　供　与

外国人研究者のために、他の研究機関への紹介、翻訳者・通訳の斡旋、資料の収集、宿舎旅行について便宜をはかつている。来日外国人研究者のためになされた便宜供与は枚挙にいとまがないがその主なものを挙げれば次の如くである。

ピアソン（イギリス）ロンドン大学教授　李弘稙（韓国）高麗大学教授
ジエルネ（フランス）パリ大学教授　ガベイン（ドイツ）ハンブルグ大学教授
ハイシッヒ（ドイツ）ボン大学教授　ウイリアムス（アメリカ）シンガポール大学客員教授
デ・ラケビルツ（オーストラリア）オーストラリア国立大学　ブレイジヤ（オーストラリア）オーストラリア国立大学

3　翻訳サーヴィス

東洋学に関する資料や、論文のレジュメの翻訳、並びにタイプライティングを行つている。

二、アジア研究に関する一般的情報の収集と出版

1　内外の研究者及び研究機関の要覧の作成

a　国内の研究機関の資料（特に大学の要覧、学生便覧、職員録等）の収集

b　国内の研究者一覧作成のためのデータをカードに採録中である。（ユネスコ東アジア文化研究センターと共同作業）

c　韓国に於ける研究者及び研究機関の一覧（Directory of Reseach Institutes and Reserchers in the

Republic of Korea）が出版の運びとなつた。（ユネスコ東アジア文化研究センターと共同作業）

d　国外の研究者一覧作成のためのアンケートを発送し、その回答を整理中である。

e　日本に於けるアジア研究者の受入れ機関に関する資料の収集を行つている。

2　内外出版物の書目の年次書目の作成

a　国内関係では、採録の対象となる文献目録の種類を、アジアに関する人文、社会科学における日本人による調査研究の主題別文献目録、学者の著作目録、日本国内の主要図書館並びに研究所の蔵書目録に置いた。一九五八・九年度出版物についてはカード作成を完了した。

b　国外で出版されたアジア関係の書目については、Journal of Asian Studies, Bibliography を基礎としてカードを採録した。

三、アジア研究に関する特殊な情報の収集及び出版

1　「アジア言語の研究と教授法」をアンケートに依つて得た資料をもとに編集中である。

2　"Selected List of Books on Japan in Western Languages, Postwar Publications" を編集、現在原稿作成中である。

3　「マスコミに現われたアジア、一九六一―一九六二」について資料の収集を終り整理中である。

4　「一九五〇年以後中国で刊行された中国考古学研究論文カードの作成と整理」については、一九五九年度分までを作成、整理を完了した。

六　研究調査活動

1　東洋学連絡委員会

財団法人東洋文庫は、戦前からの活動実績により、東洋学研究総合センターとして、広範な研究者の共同利用と一般公開性を具え研究者に対する便宜供与を行い、専門分野に於ける国内的及び国際的連絡の中心としての役割を果すことを広く期待されている。従つてその諸事業を、広く全国的組織による東洋学者の総意を反映して運営するため、昭和三十三年より、東洋学に関する主要な研究機関及び研究分野の代表者に依嘱して東洋学連絡委員会を組織し、文庫の事業計画を審議し報告をうけ、助言を行うものとした。

昭和三十七年度の委員会は左の如く行われた。

春期　六月十二日（火）

報告　昭和三十六年度事業報告

議事　昭和三十七年度事業計画案について

秋期　十一月二十七日（火）

報告　昭和三十七年度事業中間報告

議事　(イ)　昭和三十八年度事業計画案について

(ロ) 逝去委員の補充と次期委員の改選について

2 機関研究

研究課題「イスラーム諸国の社会構造の研究」

研究担当者　榎　一雄

研究協力者

荒　松雄（東京大学助教授）　蒲生礼一（東京外国語大学教授）　佐口透（富山大学教授）　嶋田襄平（中央大学助教授）　土井久弥（東京外国語大学助教授）　遠峰四郎（慶応義塾大学講師）　本田実信（北海道大学助教授）　松田寿男（早稲田大学教授）　松村潤（東洋文庫研究員）　三橋富治男（千葉大学教授）　護雅夫（東京大学助教授）　和田久徳（お茶の水女子大学助教授）

本研究は、文献の収集に重点があり、昭和三十三年度以来同じ趣旨のもとに実施せられてきた継続事業である。

(A) 分担部門を左の如く分ち、資料・研究図書の組織的収集を行なつている。

1　中央アジア（特にロシア領トルキスタン）榎一雄、佐口透

2　中央アジア（特に新疆省）松田寿男、松村潤

3　インド　土井久弥、和田久徳、荒松雄

4　イラン　蒲生礼一、本田実信

5　アラビア　嶋田襄平

6　トルコ　三橋富治男、護雅夫

7　イスラーム法学　遠峰四郎

(B)　三十七年度収集図書

①アラビア語文献　②ペルシャ語文献　③トルコ語文献の三種を重点的に購入し、とくに現地刊行のものを主とした外、これと併行して欧米刊行の研究図書の収集にも努めた。これら図書目録は「アジア地域総合研究文献目録」に掲載しているが、できる限り購入次第速報を作成して関係研究者に配付することにしている。

定期刊行物五〇冊、アラビア語文献一〇一冊、ペルシャ語文献七一冊、トルコ語文献一九六冊、欧米刊行イスラーム関係文献（アラビア関係一〇六冊、ペルシャ関係一八冊、トルコ関係九三冊）

(C)　今後の方針

アラビア・トルコ・ペルシャの三地域と併行して、残りの中央アジア・インド・中国関係の文献収集を予定しており、又これまで日本に集められている関係資料・研究書等の調査と研究状況の調査に当たりたいと希望している。

(D)　収集資料の利用

東洋文庫においては、蔵書の館外帯出は一切行なわないことを原則としているが、本研究において購入した図書資料は別置して利用者の要求に応じ、館外帯出も許可しており、これによつて研究協力者はもとより、広く一般研究者の便宜をはかつてきている。

3　各種研究委員会

第一部　近代現代アジア研究

近代日本研究委員会

近代日本研究委員会は、「開国百年記念文化事業会」よりうけついだ（昭和三十五年三月三十一日）近代日本関係資料を基本として、アジアの近代化という広い連関の中での、日本近代史の研究を進め、同時に広く外国人東洋学者の近代日本研究にも便宜を計りうるよう、基礎的調査事業を行ってきた。本年度の事業は左の通りである。

「東洋文庫所蔵近代日本関係文献目録、和書マイクロフィルムの部　第二分冊」を刊行した。（B5版　一六三頁　五〇〇部）

近代中国研究委員会

近代中国研究委員会は、昭和二十八年以来設立準備をすすめ、二十九年十一月ロックフェラー財団の財政的援助を得て発足、できるだけ広く異つた分野の研究者を集めて政治的偏見をはなれた実証的研究を行なうことと各国との研究上の自由な交流とをめざして活動してきた。本年度の事業は次の如くである。

(1)　二十世紀中国とその背景に関する研究（フォード財団援助金による。）

(イ) 研　究

佐々木正哉　近代中国における排外運動

山本　澄子　中国キリスト教会の自立運動

村松　裕次　瑞金、延安時代の中共の土地政策

小原　正治　中華人民共和国における土地改革と社会主義改造の研究

市古　宙三　陳　独　秀

(ロ) 研究者の海外派遣

山本　澄子　欧米（八ケ月）

佐々木正哉　イギリス（三ケ月）

(ハ) 「解放日報」の索引の作成

(ニ) 資料の収集と整理

収集図書　和漢書　中国文　六〇〇点　邦　文　一二〇〇点　漢　籍　八四点　洋　書　四一五点

(ホ) 近代中国研究叢刊（仮称）の編集

(2) 近代中国研究センター（アジア財団援助金による。）

従来、我が国の東洋史研究の上で、比較的軽視され勝ちであつた近代中国研究の振興をはかるため、特定少数の研究者の研究を助成するのみに止らず、むしろ広く一般の研究者に研究上の便宜を与える目的を以て開設されたも

のである。本年度の事業は次の如くである。

(イ) 参考図書室の開設

(ロ) 参考用図書資料の購入整理

(ハ) 参考用図書の編集刊行　「東洋文庫近代中国研究室欧文図書目録」B5判六七頁

第二部　東アジア研究

敦煌文献研究委員会

敦煌文献研究連絡委員会は、榎一雄氏の努力により昭和二十八～三十一年度文部省科学研究費交付金をうけて撮影せる、ブリティッシュ・ミウジアム所蔵スタイン収集敦煌文献を始めとして、国内・国外の現存西域出土古文書・古文献の所在調査、写真撮影・収集・整理及び目録の作成等を行つてその研究の推進を図り、内外における諸機関並びに研究者間の研究情報・連絡、研究上必要な資料の公開、複写サービス等をも行つてきた。本年度の事業は左の如くである。

1　国内・国外所蔵西域出土古文書・古文献の調査及び写真の収集整理

(イ) 国内　京都国立博物館に寄託されている敦煌古写経の調査を完了、藤井有隣館（京都）所蔵唐代官文書の撮影を終つて焼付写真を作成、東洋文庫に収蔵した。又国立国会図書館所蔵並びに東洋文庫に寄託中の敦煌古写経コレクションの調査を略々完了し、前年度収集した有隣館敦煌古写経写真等を整理した。（大判スクラップ・ブッ

ク三冊）

(ロ) 国外　パリの仏国国民図書館所蔵ペリオ・コレクションの未公開文献（特に法制経済文書）の撮影を引続き交渉中である。尚その過程で、ペリオ番号P二一一五窮詐弁惑論巻下の紙背に　a張仲景撰　五蔵論一巻　b平脈略例一巻　の医薬文献二点が存在することを知りえたので撮影を依頼してある。

中華人民共和国国立北京図書館所蔵敦煌写経その他については、先年東洋文庫宛一部のマイクロ・フィルムが寄贈されたが、一九六二年五月に到つて総合目録「敦煌遺書総目索引」が刊行せられたと報ぜられ、努力の結果これを入手するをえた。

2　「西域出土漢文古文書・古文献研究便覧」（仮称）の編集

西域出土古文書・古文献の総合的利用と、古文書学的取扱方法の体系化とをめざして進められつつある研究事業の一環で、前年度に作成した「研究文献に引用紹介せられたる西域出土漢文古文献・古文書内容分類参考目録」の基礎原稿を関係研究者間に廻覧し、校閲を経た。次年度以降、改訂増補原稿の完成を待って刊行の予定である。尚これに関連して、従来諸雑誌に分散掲載せられている研究論文のうち特に主要なものをマイクロ写真によつて収集整理し、月二回程度の研究会を行なつた。

3　「スタイン敦煌文献内容総合分類目録」の編集

スタイン敦煌文献に関しては既にイギリスの L. Giles　氏の目録が作られてはいるが、その不備な点を補訂し、特に東洋文庫所蔵マイクロ写真を利用する研究者に便ならしめるため、独自の構想による分類目録の作成に着手

していたが、基礎原稿（非仏教文献。古文書の部）の大部分を完成し、分類規準に関し、京都研究班と再度の打合せを行なった。三十八年三月、北京商務印書館刊行「敦煌遺書総目索引」を入手することができたので、現在これと対校中であり、三十八年度より逐次印刷刊行する予定である。

これに関連してスタイン文献写真中、重要なものを逐次焼増して内容別分類する計画を立て、古文書類の一部分から作成に着手した。（Tin 1～29 まで完了）

4　研究論文、文献目録補遺の編集

邦文・欧文・中文にわたって、一九六〇年以降のものを調査、目録カードの補充を行なうと共に「速報」として関係研究者に配布した。

宋代史研究委員会

宋代史研究委員会は、昭和二九年以来、ヨーロッパにおいて企画された宋史提要編纂に関する国際的協力事業を行い、昭和三十一年以来、(1)宋代研究文献目録及び提要の編集、(2)宋代政治史年表の作成、(3)宋代主要文集、宋代名人伝記、墓誌銘等の索引の編集等を行ってきた。本年度の事業は左記の通りである。

1　宋代主要文集索引の編集

前年度に引続き、宋代文集中の重要項目を選択、朱文公集、忠粛集、嘉祐集の語彙についてカード化した。（約五、〇〇〇枚）

2　宋代名人伝記、墓誌銘索引の編集

前年度に引続き、宋代著名人の伝記を、神道碑、墓誌銘、地方志人物伝等からカード化した。（約一、五〇〇枚）

3　宋代関係研究文献目録の増補

一九五八年（昭和三三年）以降の各年度について補充を行なうため新出文献を調査し、カード二三〇枚を増補、「文献速報」（季刊）を編集発行した。

4　「宋代研究文献提要」英訳

昨年刊行した研究文献提要を英訳し、パリの Sung Project 本部に送付した。

5　「宋代史年表」の原稿作成並びに索引カード作成（ハーバード・エンチン研究所よりの補助金による。）

宋史本紀のカード化、年表原稿化を略々終り、続資治通鑑長編、建炎以来繫年要録、宋史全文（静嘉堂蔵）による増補を開始している。来年度は特に通鑑続編（静嘉堂及び国立国会図書館蔵、マイクロフィルム・米議会図書館旧北京善本）による対校、増補を行なう予定である。又、最初主として「政治史年表」として出発したが、その後、思想、宗教、美術等の文化史的項目をも折り込んだ総合的年表へと発展し、来年度はこの面においても、先ず正史列伝中の関係記事をカード化することからはじめる予定である。

明代史研究委員会

明代史研究委員会は中国近代化の前段階としての明代史の研究をすすめ、特にアメリカにおける明代伝記事典編纂

事業との協力において、明代に刊行された地方志の伝記索引の編纂に着手した。

一、明代地方志伝記索引を編纂する前提として、日本に現存する明代地方志の実態を明らかにするため、「日本現存明代地方志目録」（B5判、二九頁、油印）を編集・刊行した。

二、明代地方志のなかの名宦志、人物志などにあらわれた明人の伝記をカードに摘録した。摘録の要項は字・号・諡・科挙資格（進士・挙人）・本貫（省・府・県）・出典などである。昭和三十八年度に継続。

三、明代史研究文献のカード補充。さきに刊行した「明代史研究文献目録」を補足する意味において、昭和三十七年度に刊行された雑誌・単行本などの明代史に関する研究文献をカードに摘録した。

清代史研究委員会

清代史研究委員会は、東アジア全域に及ぶ広大な清帝国の支配について、その成立過程を中心として研究をすすめ、特に清初史料の整理を行つてきた。昭和二十八年以来継続してきた「満文老檔」訳註事業は本年度満文老檔Ⅶ太宗4の上梓をみたが、ここに過去十数年にわたつた訳註事業も一応の完成をとげたわけである。思えば明治四十五年、内藤湖南博士が奉天の故宮より将来せられてから、すでに半世紀を閲しているのであるが、この清朝開国史料をもととして今後多くの研究が発表されることを望んでやまない。

研究会としては右の訳註篇の編纂刊行と併行して、

1　満文老檔研究篇の編纂刊行

2　満洲語辞典類の整理
3　清代伝記資料の集成
4　清初実録の整理
5　清初満洲地理の研究

などを行なつてきたが、明年度よりはこれらを逐次編集刊行する予定である。

なお、神田信夫、松村潤、岡田英弘の三人は「台湾における満蒙の言語および文献の実地調査」のため、第一回の訪台を行ない、将来の本格的調査の可能性について打診をした。（東洋学報、四五巻三号彙報参照）

また東洋文庫叢刊第十六として「西域同文志」の複製刊行をみたが、これが索引作成のため、満、漢を松村潤、蒙、蔵、準を岡田英弘が、回を本田実信が分担し、ローマ字転写を行なつた。

古代史　西周金文講読研究会　毛公鼎を終り、令彝を講読中

朝鮮研究会　李朝実録（明代満蒙史料）講読会、及び朝鮮本の整理・調査

第三部　中央アジア・イスラム・チベット研究

中央アジア・イスラム研究委員会

アジア地域の基礎的研究に対する要望に応えて、文部省科学研究費の総合研究に昭和三十三年度からいわゆる別枠

として「アジア地域の社会、経済構造」の研究が認められ、全国二〇余りの研究機関が参加して、それぞれの分担研究課題のもとに事業が進められてきたが、東洋文庫においても、本研究室を中心にイスラム地域の専門の研究者の参加協力を求めて、分担課題「イスラム諸国の社会構造」の実施にあたってきた。中央アジア・イスラム研究委員会ではその遂行を担当してきたが、本年度も今までと同じく、イスラム関係定期刊行物、トルコ語、アラビア語、ペルシア語文献の組織的収集にあたった。また総合研究としては昨年度と同じく合同研究会の開催や「連絡季報」の刊行がなされた。

チベット研究委員会

チベット研究委員会は、昭和三十一年以来東洋文庫収蔵チベット語文献の整理研究と、蔵和辞典の編集を行って来たが、その基礎の上に立った言語学的・宗教学的・歴史学的な総合的チベット研究を行うことを目指している。本年度の事業は左の如くである。

(1) 蔵和辞典の編集　以下の各種研究を通して収録語彙カードを作成している。

(2) 第十三世ダライラマ伝記の研究資料講読（ハーバード・エンチン研究所補助金による。）

(3) 日本現在蔵外チベット文献の調査　東大所蔵本を終り、東洋文庫所蔵本につき、カードを作成中である。

(4) チベット人との共同によるチベット語・チベット史・ラマ教の総合的研究（ロックフェラー財団援助金による。）

(イ) 現代チベット語の記述的研究（ラサ方言）

なお八月二十日〜九月二十一日、ユネスコ主催チベット語講習会開催に協力した。
又、その際、東洋文庫所蔵、チベット関係資料の展示を行なつた。

(ロ) 古代・中世チベット史料の研究
「バシエ」、土観ラマ「ドウムタ」及び「デプテルマルポ」の訳註を行なつている。

(ハ) ラマ教新、旧両派の比較研究
サキヤ派、ニンマ派教理資料講読を行なつている。

第四部　南アジア・インド研究

南アジア研究委員会

南アジア諸国は歴史的にも社会的にも極めて複雑で、多くの重要な問題を含んでいるにもかかわらず、未開拓な分野が多い。本研究室は、南方史基礎資料の収集整理とその調査を行う。その一環として、

オランダ国立ハーグ古文書館所蔵「連合東インド会社到着文書集」(Overgecomen Brieven)—オランダ東インド会社に集められた東インド各地駐在の同会社社員の報告書集—の目録作成　前年度に引続き一六七〇—七八年度分の整理と、一六七九年度の分についてマイクロフィルムにより翻字、タイプ転写を略々完了した。なお次年度以降は、ユネスコ東アジア文化研究センターの事業に移行する予定である。

4　研究者養成

東洋文庫は、戦前より研究活動の一環として、東洋学各特殊分野の次代を担う専門研究者を養成するため、研究生の制度があつた。従来、わが国においては、東南アジア、チベット、インド、イスラム圏及び中央アジア、満蒙等、特殊な言語・文字の修得を前提とする研究分野は、基礎的資料の集収も不充分で、その重要性にもかかわらず甚だ立ち遅れていた。戦後特にこうした未開拓分野の振興を目的として、戦前からこれら現地語資料の集収に努力を払つてきた東洋文庫は文部省の補助を得、研究者養成制度が復活された。更に右の特殊分野以外についても、ハーヴァード・エンチン研究所よりの援助金を得て大学院博士課程修了程度の人材に引続き数年研究の機会を与え、後継研究者の養成が行われてきた。文部省及びハーヴァード・エンチン研究所補助金による、本年度の研究生は左記の通りである。

「チベット史料の研究」　　金子良太

八世紀中葉から、吐蕃朝末期までのチベット史および仏教史研究についての重要史料として、吐蕃テイソン・デツエン王時代の大臣バセルナンがチベット史についての当時の伝承を覚え書きしたものと伝えられる「バシエー」がある。これには古くは「純バシエー」と「増補バシエー」の二部が存在したことが伝えられているが、現存するものは後者の写本一部のみである。「バシエー」は「プトン仏教史」をはじめとする十四世紀以後成立のチベット史料に多

くの影響を残している。中世以降成立の「青冊」（テプテルゴンボ）を初めとするチベット史書に屢々引用され、殆んどは、吐蕃王朝時代の記述を大半「バシエー」によつて行なつており、「バシエー」よりも簡略に、又より仏教的な記述に終始した。従つて、チベット史書のより原型に近いものを復原する研究として現存「バシエー」のチベット文テキストの校訂及び、その邦訳を行なつている。

「明清社会経済史の研究」

鶴見尚弘

従来の中世史研究においては、基本的な生産関係を地主↔佃戸関係と考え、専ら在地における直接的な生産関係から出発して中世史の性格規定を行おうとした。従つてそこでは政治機構としての専制的な王朝権力の存続が、いかなる理由によつて可能であつたかという問題は捨象される傾向にあつた。このような中世史研究の現状において、基本的な生産関係である地主↔佃戸関係と、上部構造としてのアジア的デイスポテイズム存続の条件を矛盾なく全構造的に把握することが必要であり、これらの諸問題を解明するためには、その実現の場である里甲体制の究明が、先ず果されなくてはならない。

このような観点から、まず、里甲体制成立の条件（既存の村落秩序と里甲制との関連、里長戸の物的諸条件の問題）、里甲体制内の階級関係（自作農と里長戸・畸零戸との支配隷属関係）及び超越的専制皇帝権力の出現と里甲体制等の関係を実録・政書等にみられる諸法令を通して政策の主観的意図を把握し、また地方志・文集・類書等によつて、明代の社会的諸条件を分析し、これらを媒体として権力の性格をあきらかにしようとする。

「ベトナムの国際的位置」　酒井良樹

従来の東アジア史研究に対する方法論的批判の試みとして、中国における明王朝と、ベトナムをはじめ東南アジア諸民族史、民俗学調査の成果とを比較しつつ、東アジアにおける封建制の概念を追求した。

5　職員の研究業績

青山定雄

（著　書）『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』（東京　吉川弘文館　一九六三年三月　六一八頁）

生田滋

（論　文）ヘンドリック・ハメル著「朝鮮幽囚記」（二）訳註（「朝鮮学報」二十三、三十七年四月）

岩井大慧

（論　文）「瞿盧折娜考」（「駒沢大学文学部研究紀要」第二十号　一九六二年四月、四六―五八頁）

「遊牧アジア北方民族の禱雨について」（「駒沢史学」十周年記念号　一九六二年十一月、一二―一九頁）

（講　演）牛黄考―動物の胆石が薬になる話―（三田史学会「橋本増吉博士七回忌記念講演会」昭和三十七年五月十九日）

（随　筆）童話桃太郎と西王母（「ひびや」東京都日比谷図書館々報、第五十四号「余滴」欄一三頁、一九六二

年十月三十一日発行）

岩生成一

（著　書）『朱印船と日本町』（至文堂　東京　一九六二年十二月）

（編　著）『外国人の見た日本、南蛮渡来以後』（筑摩書房　東京　一九六二年十月）

（論　文）「蘭商館長イザーク・チッケング研究資料」（『石田・和田先生頌寿記念史学論文集』日本大学史学会、一九六二年十月）

「近世日本の海外貿易」（「歴史」二五巻、東北史学会　一九六二年十一月）

（講　演）「明末清初の南洋華僑」（東方学会総会講演　一九六二年一十月）

「イギリス商館長 Richard Cocks の日記とその史料的価値」（Asiatic Society of Japan 例会講演　一九六二年五月）

梅原末治

（編　著）『日本蒐儲支那古銅精華』第五冊（大阪山中商会　大阪　一九六三年九月）

『泉屋清賞』新収編（京都　住友家自刊本、京都　一九六二年十二月）

『中国古銅器観目録』（兵庫　黒川文化研究所　一九六二年五月）

（論　文）「南方アジアの銅鼓」（『東方学会設立十五周年記念　東方論集』七月）

「十鈴獣帯鏡」（「国華」第八四二号　五月）

「日本出土の漢中平の紀年太刀」（「大和文化研究」七ノ一一　十一月）
「古鏡より観たる日本の上古」（「史林」一九六二年六号　十一月）
「新たに知られた古い白玻璃瓢形壺」（「ミュジアム」一四二号　一九六三年一月）
「飛鳥時代天蓋軸木の一遺例」（「大和文化研究」八ノ二　同　二月）
「銅鐸攷」（「考古学雑誌」四八ノ三　同　一月）
「印度支那の古代遺跡に就いての二つの所見」（「史学」第五巻第四号　三月）

（講　演）
「殷代古銅器観」（一九六二年四月三〇日　日本考古学協会　第廿六回総会）
「日本に於ける金石文字の学の発達」（同六月九日　大谷大学史学会公開講演）
「東大寺古墳の発掘と漢の紀年銘鉄刀」（同十月十八日　天理大学図書館設立記念講演）
「近江と銅鐸」（一九六二年十一月一日　滋賀県文化館講演）

榎　一　雄

一、出張講義

一九六二年二月から六月まで五ケ月、メキシコ市メキシコ学院（El Colegio de México, Guanajuato 125, México F. D. F.）において「支那日本文化」（La cultura sinojaponesa）と題し、支那・朝鮮、日本を中心とする東アジアの文化の特質について講義す。

二、史料の調査及び採集

一九六二年二月から七月まで、メキシコ市にある中央古文書館（Archivo general de la nación）に就いて、十六―十九世紀、スペイン支配時代の太平洋貿易に関するスペイン語史料を調査、その主要なるものの一部、約六万三千頁を撮影、関係書籍若干を集めて帰る。

三、論文・序文・書評

(1) メキシコ流寓のアジア婦人チーナ＝ポブラーナのこと（『大類伸博士喜寿紀念史学論文集』日本女子大学史学研究会編、東京、山川出版社刊、昭和三十七年十一月、二一―四九頁）

(2) メキシコより帰りて（談話要旨）（「東洋学報」第四五巻第二号、一九六二年九月、一四〇頁）

(3) 「加藤繁俳句集」序文（東京、加藤陽氏刊、昭和三十七年十一月、一―八頁）

(4) ホモサピエンス（有知人）がいちばん古い―現生人類の系譜についての疑問に対して―（「月刊教育」第十一巻四二号、東京、講談社刊、一九六二年十二月十五日刊、四―五頁）

(5) 大月氏族とはなにか（「月刊教育」第十二巻第九号、東京、講談社刊、一九六三年三月二五日、八―九頁）

(6) 長沢和俊著「楼蘭王国」（書評）（東京新聞夕刊、一九六三年一月二二日）

四、講　演

(1) Dos estudios comparativos acerca de la história del Japon e de la Cina: (1) 秦始皇帝 e 仁徳天皇, (2)厳復 e 福沢諭吉（一九六二年六月八、十五、二二日、メキシコ市 Universidad Iberoamericana にて）

(2) メキシコより帰りて（東洋文庫談話会　一九六二年九月十五日、三ノ(2)参照）

(3) Il Cristianismo nestoriano in Cina nel Medio Evo secondo le recente ricerche storiche e archeologiche（一九六三年三月三一日ローマ市国立リンチェイ学士院 Accademia Nazionale dei Lincei における L'Oriente cristiano nella storia della civiltà に関する講演会にて）

岡田英弘

（著書）『満文老檔Ⅶ太宗4』（東洋文庫叢刊第十二　東洋文庫　一九六三年三月）

（論文）「蒙古史料に見える初期の蒙蔵関係」（「東方学」第二十三輯、一九六二年　三月）

「蒙古源流年表稿」（「史学雑誌」第七十一編第六号、一九六二年六月）

（書評）「ワルター・ハイシヒ著『仏典蒙訳史の研究』」（「史学雑誌」第七十一編第九号、一九六二年九月）

片桐一男

（論文）「箱館戦争史料について」（「日本歴史」第一七〇号、四八―五五頁、一九六二年七月一日）

（講演）「『跋太亜肹亜局方』と森田千庵」（第四回蘭学資料研究会大会、於京都大学、一九六二年五月一三日、研究報告　第一一一号所収）

神田信夫

（著書）『満文老檔』Ⅶ太宗4（東洋文庫叢刊第十二　東洋文庫　一九六三年三月）満文老檔研究会の一員として共同執筆

（論文）「八旗通志の宗室王公伝について」（『大類伸博士喜寿記念史学論文集』九一―一〇八頁、日本女子大

学史学研究室、一九六二年十一月）

「続満漢名臣伝について」（「駿台史学」十三号　一二〇―一二五頁　一九六三年三月）

（書評）「星斌夫訳註『清史稿漕運志訳註』」（東京大学東洋史談話会　一九六二年九月二十九日、「史学雑誌」七一編十一号　一〇〇―一〇四頁）

「謝国楨著『明清筆記談叢』」（「東洋学報」四五巻三号　一二九―一三二頁）

（講演）「満文老檔に見える毛文龍の書簡」（東洋文庫談話会　一九六二年七月二十一日）

「台湾見聞談」（東洋文庫談話会　一九六二年十二月一日）

菊池英夫

（論文）「節度使制確立以前における『軍』制度の展開・続篇」（「東洋学報」、四十五巻一号、昭和三十七年六月）

（講演）「チベット支配下の敦煌における漢人の叛乱」（於東洋文庫談話会、昭和三十七年十二月十五日）

「藩鎮研究の現段階―九～十世紀中国における機力機構―」（法制史学会東京部会　於中央大学　昭和三十八年一月二十六日）

後藤均平

（編著）Postwar Japanese Studies on the Chinese Language, (Monumenta Serica Vol. XX, 1961, pp. 368―393)

末松保和

（論　文）「朝鮮古代国家の軍事組織」（『古代史講座』第五巻　二八七―三〇六頁　東京、学生社、一九六二年十月）

関野　雄

（編　書）『日本考古学辞典』（東京堂、昭和三十七年十二月）

（論　文）「楽浪と洛陽」（角川版『世界美術全集』月報一五、昭和三十七年五月、一―四頁）

「黄河文明はどのように発展したか」（『歴史教育研究』二四、昭和三十七年七月、四〇―五三頁）

「土の芸術」（角川版『世界美術全集』一二、昭和三十七年十一月、一九一―一九七頁）

（動　向）「考古学史・東アジア」（平凡社『世界考古学大系』一六、昭和三十七年十二月、二一九―二三八頁）

「東亜考古学・昭和三十二年度」（『日本考古学年報』一〇、和昭三十八年三月、五―六、一二―一三、二四―二九頁）

田中時彦

（著　書）『明治維新の政局と鉄道建設』（吉川弘文館　東京　昭和三十八年三月　四〇〇頁）

（論　文）「日本における鉄道導入政策の政治的背景　―その国際的国内的要因に関する史的分析―」（「東京都立大学法学会雑誌」第三巻一、二、合併号―小倉庫次、黒田覚教授還暦祝賀記念号―昭和三十八年三月、所収）

田中正俊

（論　文）「鄧茂七の乱の所伝について―『雙槐歳抄』と「監軍暦略」―」（清水博士追悼記念『明代史論叢』六

三七―六七二頁）

鳥海　靖

（論　文）「帝国議会開設に至る『民党』の形成」（「東京大学教養学部人文科学科紀要」第二十八輯　歴史学研究報告第十集『歴史と文化』Ⅵ一三七頁―一八一頁　一九六三年三月）

（書　評）「長谷川正安著『昭和憲法史』」（「日本史の研究」三十七輯　二六―二七頁　一九六二年六月）

松村　潤

（著　書）『満文老檔』Ⅶ太宗4（東洋文庫叢刊第十二　東洋文庫　一九六三年三月）満文老檔研究会の一員として共同執筆

（論　文）「清初盛京の宮殿」（「日本大学人文科学研究所紀要」第四輯　一九六三年三月）

（彙　報）「台湾における満蒙の言語および文献の実地調査」（「東洋学報」四五巻三号　一九六二年十二月）

（講　演）「陳誠の使西域記について」（日本大学文理学部学術研究発表会　一九六二年十一月）

松本信広

（論　文）「古代の海上交通」（「日本民俗学」二六号　一九六二年十一月）

（講　演）「越人の舟」（広島大学史学研究会大会　一九六二年十月廿日）

「俚獠の文化」（京大東洋史談話会三十七年度大会　一九六二年十一月三日）

護　雅夫

（論　文）「遊牧国家の君主たち―竜城を中心として―」（『世界考古学大系』九〔北方ユーラシア・中央アジア〕一五〇―一五三頁、東京、平凡社、一九六二年四月）

「イェニセイ碑文に見える qu(o?) y, öz 両語について」（「東洋学報」四五巻一号、一―三三頁、一九六二年六月）

「突厥の国家―『オルホン碑文』を中心に―」（『古代史講座』四　古代国家の構造（上）ディスポティズムと古代民主制　七九―一一二頁、東京、学生社、一九六二年七月）

「ウイグル語訳金光明最勝王経」（「史学雑誌」七一巻九号、六六―八一頁、一九六二年九月）

「古代チュルク社会に関する覚書―『イェニセイ碑文』を中心に―」（『古代史講座』六　古代社会の構造（上）―古代家族と村落機構―　一四九―一八六頁、東京、学生社、一九六二年一二月）

（翻　訳）「ナスレッディン＝ホジャとその物語」（トルコ語）（「オリエント」五巻一号、三三―四五頁、一九六二年三月）

「アンネマリー＝フォン＝ガベン『ウイグル王国における品位のある姿勢』」（英語）（「東洋学報」四五巻三号、九四―一〇四頁、一九六二年一二月）

「ケマル＝チュー『トルコの表紙装釘について』」（トルコ語）（「東洋学報」四四巻三号、八九―一〇三頁、一九六一年一二月）

「ファルク＝スメル『アナトリア移住前後のチュルク＝オグズ族』」（トルコ語）（「遊牧社会史探求」

一七冊、一―二六頁、一九六二年一〇月）

（紹　介）"İnan, Abdülkadir: Tarihte ve Bugün Şamanizm... Materyallar ve Araştırmalar ..., Türk Tarih Kurumu Yayınlarından, Ⅶ. Seri, No. 24, Ankara, 1954"（「東洋学報」四四巻四号、一五六―一六〇頁、一九六二年三月）

"Laude-Cirtautas, Ilse: Der Gebrauch der Farbbezeichnungen in den Türkdialekten, Wiesbaden, 1961"（「東洋学報」四五巻二号、一三七―一四五頁、一九六二年九月）

"Eastern History"（Recent Trends of East Asian Studies in Japan with Bibliography 一一一―一四〇頁、The Centre for East Asian Cultural Studies. 一一一―一四〇頁、一九六二年三月）

森　岡　康

（講　演）「贖還問題の一管見（許博の疏文と贖還批判）」（第十三回朝鮮学会大会　東京天理教館にて　昭和三十七年十月十四日）

（論　文）「贖還被擄婦人の離異問題について」（「朝鮮学報」第二十六輯、昭和三十八年一月）

山　根　幸　夫

（論　文）「明代華北における役法の特質」（明代史論叢編纂委員会編『明代史論叢』二二一―二五〇頁、東京、株式会社大安、一九六二年六月三〇日）

「明代福建恵安県の田土統計」（「史観」第六五・六・七合冊、一八二―二〇〇頁、一九六二年一二月二〇日）

「戊戌変法と日本―康有為の〈明治維新〉把握を中心として―」（岩間徹編『変革期の社会』一七九―二一〇頁、東京、御茶の水書房、一九六二年九月二〇日）

（編　書）「日本現存明代地方志目録」（東洋文庫、B5判、二九頁、油印、一九六二年十月）

「明代社会経済史研究文献目録」（明代史論叢編纂委員会編『明代史論叢』一―三二頁、東京、株式会社大安、一九六二年六月三〇日）

（書　評）「清水博士追悼記念明代史論叢の刊行にあたって」（「大安」八巻八号、一三―一四頁、一九六二年九月一日）

「任以都訳註；Ch'ing Administrative Terms」（東京大学東洋史談話会、一九六二年六月九日）

（講　演）「五四運動期における北大校長蔡元培」（東京女子大比較文化研究所談話会、一九六三年二月七日）

附(一) 東洋文庫附置 ユネスコ東アジア文化研究センター

(The Centre for East Asian Cultural Studies)

ユネスコ東アジア文化研究センターは、東洋文庫の情報連絡機関としての機能に基づき、ユネスコの要望によって、昭和三十六年七月一日東洋文庫の附置機関として設立せられた。

ユネスコは一九五七年以来、向う十年間の継続事業として「東西文化価値の相互理解に関する重要事業計画」(The major project on the mutual appreciation of Eastern and Western cultural values) を推進しているが、この目的遂行に恒久的に貢献する施設 (associated institutions) として、まず一九六一—六二年度に東アジア(ビルマ以東)各国の研究機関の連絡網の中心となるべきセンターの設立が計画された。同じ趣旨による同様の施設がベイルート、ダマスカス、テヘラン、ニューデリー等のアジア各地にも設置せられつつある。日本ユネスコ国内委員会は、これに呼応して、人文科学・社会科学の両分野に亘る東アジア地域の綜合的文化研究を促進し、その成果を世界に紹介し、アジアに対する正しい理解を増進させるため、このセンターを東京に設置することとし、従来とも東洋学に関する国際的情報連絡機関としての役割をも果してきた東洋文庫に、これを附置することとなった。

一 目 的

東アジア各国に於ける研究機関と連絡して東アジア(ビルマ以東)地域の各国に於ける東アジア文化に関する研究

（人文科学・社会科学）の情報・連絡を緊密にすると共に、その研究を促進し、且つ成果の普及を計る、いわばクリアリング・ハウスとしての機能を発揮することを目的とする。

二　経　営

当センターの経費は政府補助金及びユネスコ援助金によつて賄われる。

三　機　構

- 所長
  - 運営委員会（委員二〇人）
  - 専門委員会（必要数）
  - 副所長
    - 庶務外事室（室長一、研究員一、事務員二）
    - 調査資料室（室長一、研究員二）
    - 普及室（室長一、研究員二）
  - 顧問（十人）
  - 参与（二十一人）
  - 海外諮問委員

四　役員及所員

所長　辻　直四郎

運営委員

*赤石清悦　*一又正雄　東畑精一　岩生成一

*中村　元　*岡野　澄　服部四郎　*尾高邦雄

福井康順　貝塚茂樹　岸本英夫　*前田陽一

桑原武夫　松本信広　*坂本太郎　*山本達郎

高橋幸八郎　結城令聞　*田中一松　*吉川幸次郎

（*印は　任期三年）

顧問

大浜信泉　鳥養利三郎　金田一京助　原田淑人

小島祐馬　久松潜一　鈴木大拙　宮沢俊義

高垣寅次郎　和田　清

参与

青山秀夫　石田幹之助　石田英一郎　岩井大慧

岩淵悦太郎　長尾雅人　織田武雄　仁井田陞

海後宗臣　丸山真男　城戸又一　宮崎市定

鈴木　俊　宮本正尊　関口隆克　三上次男

高橋長太郎　水野清一　田村実造　渡辺　進

時枝誠記

所員

副所長　榎　一雄

所員　生田　滋　岩崎富久男　大谷公子　岡田英弘

後藤均平　斎藤　博　高橋龍雄　田中時彦

二宮　久　山口千賀子　平野　豊（東洋文庫総務部参事兼務）

五　運　営

運営委員会（委員二〇名）事業の運営に関する事項を審議する。

顧問会議（顧問一〇名）所長の諮問に応じ、事業について助言する。

六　事　業

センターの行う事業の主なるものは左の如くである。

1　国際的協力による調査研究

2　内外研究機関との連絡および情報資料の交換

3　東アジア文化研究に関する資料の調査蒐集および交換

4　上記の諸事業、諸情報を速報する「東アジア文化研究」（センター機関誌、季刊）の刊行

5　東アジア文化研究に関する諸資料の刊行

(イ)　内外研究機関及び研究者一覧

(ロ)　各種の文献目録類

6　東アジア文化の研究成果の普及

(イ)　研究書・概説書の出版

(ロ)　非専門読者対象の読物「東アジア文化研究叢書」の編集刊行

7　東アジア文化に関する、東アジア地域外（主としてヨーロッパ）に保存されている史料の調査

8　内外学者の研究に対する便宜供与

9　フェローシップの企画および斡旋

10　研究会・講習会の開催

11　国際会議・シンポジウムの開催

12　その他センターの目的達成に必要な事業

＊刊行物はすべて英文である。

七　昭和三十七年度事業概況

I　運営委員会及び顧問会議

運営委員会は、本年度は、五月二二日、七月三日、十一月二四日、三月二六日の計四回開かれて、事業運営に関する諸事項を討議した。顧問会議は、特に一九六三～六四年度申請のユネスコ正規事業、参加事業に関する諮問を行なうため、三月二六日に開かれた。今年度の運営委員会は、前年度のそれに比べて、その出席率は必らずしもかんばしいものではなかつたが、これは各事業の専門委員会が強固になり、この方面の委員会討議が事業を推進する原動力となつたためで、事業第二年目として当然の現象であつたと思われる。

Ⅱ　調査研究

調査研究　(A)

題目「東アジア諸国における社会的階層と社会移動に関する国際的協力調査」

このプロジェクトは、昭和三六年度に、ユネスコの承認を得て、その正規事業として、昭和四一年度までの六年計画の事業として発足した。第二年目に当る本年度においては、その一九六一～一九六二年プログラムに基づいて、関係各国の研究協力者に、上記課題に関する各国の研究動向報告書を依頼し、これらを蒐集し終つた。これらの報告書は整理されて、一九六三～一九六四年プログラムである国際シンポジアムの資料として活用される。また、この事業の国際協力を促進させるために、昭和三七年一〇月～一一月センターの榎副所長が、三八年二月～三月にこのプロジェクトの専門委員中根千枝氏が、それぞれ東南アジア諸国を歴訪した。これらの調査研究は下述のセンター季刊誌「東アジア文化研究」vol. Ⅱ, Nos. 3～4 にその特集号として掲載されている。

調査研究 (B)

課　題「西洋文明の受容における東アジア諸国の歴史的背景に関する国際的協力調査」

このプロジェクトが、ユネスコ正規事業としての承認をえて、一九六六年までの五カ年計画事業として発足したのは、昨年一〇月以降のことである。その初年度にあたる本年度においては、日本専門委員会を設立し、プロジェクトの事業概要を関係各国に報知して、国際協力を要請するとともに、研究のための史料に関する案内書（謄写印刷）を作製して各国の協力者・協力機関にこれを配布した。一方プロジェクトの説明と、協力の要請をかねて、上記複副所長の東南アジア歴訪が行なわれたし、また別に同じ目的でセンターの岡田研究員は昨年一一月に台湾を、今年三月に香港を訪問した。

Ⅲ　連絡及び情報交換

(1)　内外研究機関研究者一覧の作成

本年度はアジア各国の研究機関ならびに研究者についての調査を、上記の調査旅行のたびごとに各国に協力依頼を行ない、それぞれの情報も次第に蒐集されている。そのうち、完成した部分を優先的に編集出版する計画である。本年度に出版を完了したものは下記の如くである。

1　日本における東アジア研究者一覧

2　朝鮮における東アジア研究の研究機関および研究者一覧

(2)　季刊「東アジア文化研究」の刊行

本年度は全四冊をNos. 1〜2, Nos. 3〜4の二冊として刊行した。前者は主として日本における東アジア研究プロジェクトの紹介であり、後者は既述の如く、調査旅行報告書の特集である。

(3) 地域外資料目録の刊行

前年度に引続き国内所蔵当該未刊資料目録のマイクロ・フイルム撮影を企画し、本年度は天理図書館所蔵のオランダ東印度会社関係未刊史料目録を取上げ、これを完了した。

(4) 文献目録の作成

本年度の之に関する出版は下記の如くである。

「日本における東アジア文化研究の書誌活動」

(5) 図書資料の購入

本年度は洋書・和書計一七五点を購入した。前年度に比して連絡情報交換の拡大と、それにもとずく上記諸事業の出版編集のため、当初予算計画を大幅に変更してこれに関する図書資料を収集した。

Ⅳ 出版物の作成

(1) 研究書、概説書の翻訳出版

前年度翻訳を完成した久松潜一博士稿「日本文学史」は下記の図書として本年度出版された。

「日本文学の美・日本文学史概説」

また本年度、翻訳、来年度出版の計画である董作賓「甲骨学五十年」は、その英訳を完成した。

(2) 「東アジア文化研究叢書」の編集と出版

ユネスコとの契約により一九六一～六二年の二年間に最初の八巻を出版する計画を持つこの事業は、本年度下記の如く、その出版を完了した。

1 中山伊知郎「日本の工業化」（シリーズ四）

2 センター編「朝鮮小史」（シリーズ五）

3 羅 香 林「香港と泰西文化の交流」（シリーズ六）

Ⅴ 研究会、講習会の開催

(1) 講 習 会

本年度はチベット語の講習会を昭和三七年八月一〇日～九月二〇日の期間東洋文庫において行なつた。出席者は二八名。講師は次の通りであつた。

多田等観、北村甫、金子良太、ソナム・ギャムツオ（インフォーマント）

Ⅵ 外人研究者に対する便宜供与

センターの事業活動に伴ない、来日外人研究者に対する便宜供与は前年度にくらべて著しく増大した。

附(二) 東洋学術協会

評議員　石田幹之助　岩井大慧　岩生成一　梅原末治　榎一雄
白鳥清　末松保和　辻直四郎　原田淑人　三上次男
山本達郎　和田清

編輯委員　市古宙三　衛藤瀋吉　栗原朋信　河野六郎　斯波義信
関野雄　坂野正高　藤井宏　藤田正典　堀敏一
村上正二　守屋美都雄　箭内健次　和田久徳

常任委員　池田温　宇都木章　榎一雄　神田信夫　菊池英夫
北村甫　佐々木正哉　田中正俊　松村潤　護雅夫
山根幸夫

幹事　杉野純子

東洋学報第四拾五巻第一号―四号目次

第四拾五巻第一号（昭和三十七年六月）

イエニセイ碑文に見える qu(o?)y, öz 両語について……護雅夫

節度使制確立以前における「軍」制度の展開（続編）……菊池英夫

名弁の思想（Ⅰ）―公孫竜の思想―……高田淳
魏西晋貴族論……越智重明
楊聯陞著　中国制度史論集……池田温
唐長孺著　魏晋南北朝史論叢、同続編……宮川尚志
粛公権著　翁同龢与戊戌維新……波多野善大
衛聚賢著　山西票号史……宮下忠雄
チェン著　袁世凱……渡辺惇
呉相湘主編　中国現代史叢刊　第三冊……菊池貴晴
窪徳忠著　庚申信仰の研究　―日中宗教交渉史―……松本雅明

第四拾五巻　第二号（昭和三十七年九月）

唐代租庸調制下の勾徴に就いて……日野開三郎
旗地の「取租冊檔」および「差銀冊檔」について（上）……村松祐次
曹魏の典農部屯田の消長……藤家礼之助
名弁の思想（Ⅱ）―恵施の思想―……高田淳
呉緝華著　明代海運及運河的研究……星斌夫
景珩・林言椒編　太平天国革命性質問題討論集……河鰭源治

陳公博著　ウイルバー編　中国における共産主義運動……藤田正典
劉禺生著　銭実甫整理世載堂雑憶……佐々木正哉
バトラー等編　英国外交文書（一九一九―一九三九）……佐々木正哉
フォイエルワーカー・鄭共著　中国近代史論著選目……佐々木正哉
ラウデ＝ツイルタウタス著　チュルク諸方言に於る色彩呼称の用法……護雅夫
メキシコより帰りて……榎一雄
第四拾五巻　第三号（昭和三十七年十二月）
「墨子」諸篇の著作年代（上）―十論二十三篇について―……渡辺卓
旗地の「取租冊檔」および「差銀冊檔」について（下）……村松祐次
中国共産党の初期全国代表大会関係文書について……藤田正典
ウイグル王国における品位のある姿勢……アンネマリー＝フォン＝ガベン
ヨーロッパにある満洲語文献について……池上二良
佐藤堅司著　孫子の思想史的研究……有馬成甫
西嶋定生著　中国古代帝国の形成と構造―二十等爵制の研究―……栗原朋信
謝国楨著　明清筆記談叢……神田信夫
李定一著　中美外交史　第一冊　一七八四―一八六〇……百瀬弘

劉広京著　清末の中国における英・米汽船会社の対抗関係　一八六二―一八七四……田中正美
ワット著　ムハンマド　予言者と政治家……嶋田襄平
台湾における満蒙の言語および文献の実地調査……松村潤

第四拾五巻　第四号（昭和三十八年三月）

明代チベットのリゴンパ派の系統について……佐藤長
「墨子」諸篇の著作年代（下）―十論二十三篇について―……渡辺卓
ロシアと清の貿易について……吉田金一
咸豊三年厦門小刀会の叛乱……佐々木正哉
辛亥革命史研究をめぐつて―とくに戦後の研究動向―……中村義
セベス著　耶蘇会士とネルチンスク露清条約（一六八九年）―耶蘇会士ペレイラの日記―……吉田金一
広東省文史研究館編　三元里人民抗英闘争史料……佐々木正哉
商衍鑾著　太平天国科挙考試紀略……河鰭源治
コルクマズ著　チュルク語の後置詞 učun ～ üčün ～ ičin　そのほかの語源について……護雅夫
フォン＝ガベン著　高昌のウイグル王国（八五〇―一二五〇年）……護雅夫

昭和三十八年十二月二十一日印刷
昭和三十八年十二月二十五日発行
〔非売品〕

財団法人東洋文庫年報

発行者　榎　一　雄
東京都文京区駒込上富士前町一四七

印刷所　創　文　社
東京都文京区白山御殿町九

発行所　財団法人　東　洋　文　庫
東京都文京区駒込上富士町一四七
電話（942）〇一二一
（振替　東京　六七〇三番）